

k-507

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第10集

戸塚山古墳群詳細分布調査報告書

昭和 59 年 3 月 1 日
米 沢 市 教 育 委 員 会

序 文

このたび、文化庁のご指導により、本市古代文化の聖地と言われている戸塚山古墳群の詳細分布調査事業が終了しました。本報告書はその事業結果をまとめたものであります。

昔から、戸塚山は古墳時代の刀剣や土器などが出土する所として知られていました。その後、一部の考古学研究者などの調査研究により古墳が存在することが明らかになりました。昭和53年に本市の考古学研究グループ「まんぎり会」が測量調査を行い、山頂には前方後円墳、円墳、帆立貝式古墳の存在が解明されました。昭和57年には本市教育委員会が帆立貝式古墳の学術調査を行い、壮年期女性の人骨の出土など、全国的にも注目を浴びたところであります。

今回の調査の結果、戸塚山にある古墳は現存するもので193基破壊されたものを含めると約225基にものぼることが分かりました。また、五世紀頃から八世紀までの約三百年間連続として私たちの祖先が築造した古墳の存在の他に、古代末期から中世にかけてのものとして推定される中世塚群も多数発見されました。

今後は、文化庁の指導を仰ぎながら、山形県の「風土記の丘」建記構想とも関連させ、ふるさとの貴重な文化遺産である戸塚山古墳群のよりよい保護、保存に努力していきたいと考えております。

最後に、文化庁、山形県教育委員会文化課からの適切なお指導と地元上郷地区史跡保存会、まんぎり会の暖かいご支援に、心から厚くお礼を申し上げます。

昭和59年2月

米沢市教育委員会

教育長 北 目 二 郎



戸塚山全景（笹原遺跡より望む）



戸塚山137号墳全景

例 言

1. 本書は文化庁の国庫補助をうけて、昭和58年4月1日から同年4月30日と同年11月5日から同年12月5日の期間で実施した戸塚山古墳群詳細分布調査報告書である。
2. 分布調査は米沢市教育委員会が主体となって、戸塚山古墳群の分布状況と数量把握を図るため、戸塚山全域を調査対象とし、古墳登録、古墳群及び周辺地形の測量を行なった。測量はトラバース測量、十字トラバース測量を採用、縮尺は百分の1、二百五十分の1を使用する。
3. 調査体制は次の通りである。

調査総括 黒田信介
調査主任 手塚 孝
同副主任 亀田昊明、菊地政信
同補助員 小松佳子、樋口真紀、我妻徳枝、伊藤清美
中島正己、岩見和泰、門脇耕一、高橋亜貴子（山形大学学生）
調査協力 山形県教育庁文化課、米沢市上郷地区史跡保存会（会長 星 宗男） 吉野一郎
〔地元地権者〕 須藤金吾、情野和雄、加藤正家、菅野英一郎、玉虫恒雄、須藤統一、
玉虫清吉、加藤甲子夫、加藤惟一、須藤良藏、星浩一郎、加藤久司、手塚衛一、
星 賢一、須藤栄喜、高橋孝雄、後藤 敬、星 藤作、我妻隆一、佐久間武、
佐藤武夫、高橋宮雄、加藤喜代子、情野忠養、本田貴重、近野吉平、鈴木久栄、
早田昭雄、柿間章三、高橋英一、星 一郎、本田章英、上新田、森合、上浅川、
金ヶ崎地区（順不同）

調査指導 加藤 稔 事務局 引地孝忠、木村琢美、金子正廣
4. 本書の作成は、手塚 孝、亀田昊明、菊地政信が行い、Ⅰ・Ⅱを菊地、Ⅲ・Ⅳを手塚、Ⅴを亀田がそれぞれ担当し、編集、校正に関しては木村琢美、金子正廣がその責務に当った。
5. 報告書内の古墳記号はアルファベットの「M」を採用した。古墳の現状については、状況を明確にするように基本図化表を作り、それに沿っている。
6. 挿図縮尺は、全体図を2千分の1、山崎古墳群4百分の1、他の各支群は千分の1、その他は5千分の1、M140号、M187号、M295号を2百分の1、M34号は縮尺不同とした。
挿図での方位は真北に統一した。
7. 3色刷の測量図に関しては赤10m以上、青7～9m、黒7m未満と古墳を3段階に色別した。

本文目次

序文	
例言	
I 調査に至る経過	1
II 戸塚山周辺の遺跡と地形	2
III 調査の経過	6
1. 分布調査	6
2. 測量調査	6
3. 戸塚山古墳群と中世遺構	7
IV 古墳群	8
1. 古墳分布と標高	8
2. 古墳の規模	9
3. 古墳の状況	11
(1) 消滅古墳	11
(2) 現存する古墳の状況	11
4. 古墳の形態	13
(1) 古墳	13
(2) 方墳	14
(3) 帆立貝式古墳	15
(4) 前方後円墳	16
5. その他の古墳について	16
V 中世遺構	31
1. 塚群	31
(1) 萩ノ森塚群	33
(2) 堤入東塚群	33
(3) 堤入西塚群	34
(4) 小山塚	34
2. 廃寺跡	35
(1) 飯塚廃寺	36
(2) 堤入廃寺	37
3. 館跡(戸塚山館跡)	38
4. 行場と行道	39
5. まとめと課題	40

付 表 目 次

第1表	戸塚山周辺の遺跡地名表	5
第2表	戸塚山古墳標高類別表	8
第3表	戸塚山古墳群計測類別表	10
第4表	戸塚山古墳破壊状況分類表	13
第5表	戸塚山古墳群分布調査一覧表	17

挿 図 目 次

巻頭図版

第1図	戸塚山古墳群と周辺の遺跡分布図	4
第2図	戸塚山古墳破壊状況概念図	12
第3図	戸塚山M34号墳平面図	14
第4図	戸塚山M140号墳	15
第5図	戸塚山金ヶ崎古墳群測量図	25
第6図	戸塚山飯塚北古墳群測量図	26
第7図	戸塚山飯塚南古墳群測量図	27
第8図	森合西、森合東、上浅川A、上浅川B古墳群測量図	28
第9図	戸塚山山崎古墳群測量図	30
第10図	中世塚分類表	32
第11図	戸塚山行場出土硬実測図	37
第12図	戸塚山M187号、M295号墳測量図	43
第13図	戸塚山中世遺構概要図	44
第14図	戸塚山行道・行場概念図	45

図 版 目 次

巻頭図版	戸塚山全景
	戸塚山137号墳全景
第一図版	M179号墳全景
	M181号墳全景
第二図版	飯塚北古墳群出土直刀、鉄鍔、柄

I 調査に至る経過

戸塚山古墳群が学術的に報告されたのは昭和12年の東置賜郡史であり、当時早稲田大学教授の西村真次氏が2基の開口した古墳を調査して、その成果を東置賜地方の古墳分布の中で触れられたのが最初である。

その後、昭和27年に山形県文化財調査委員会は県内古墳の総合的調査と報告書発刊を目的とした調査を実施し、昭和28年に調査報告書『山形県の古墳』を発刊している。調査は調査委員の柏倉亮吉氏が中心となり、米沢市内では長手古墳と戸塚山古墳群の二者を調査され、長手古墳を置賜地方の南端と位置付ける一方、戸塚山古墳は数十基にのぼることを指し、置賜地方の中心的な位置を占めると述べられている。

だがその後、正式な調査も行なわれないこともあって、戸塚山古墳群の重要性を表面化するまでには至らなかった。

一方では、高畠町の羽山古墳出土の優美な玉類の発見等が引き金となって、宝目当の盗掘が高畠町の中心に起り、戸塚山も例外ではなく数十基が大正～昭和20年代に掘られ、その中には、旧山形高等学校教授安齋 徹氏の5基の発掘も含まれている。その初年は明治28年に及ぶという。

昭和50年に入ると、米沢の考古学研究グループまんぎり会（会長 手塚孝）が発足し、第1回の記念事業として、戸塚山古墳群を選出し、同年4月と11月に亀田、手塚、横戸らによる分布調査を実施している。深緑が繁る夏場にもかかわらず戸塚山全体で6ヶ所の古墳群139基を確認、中でも山頂付近に発見した137～139号墳の3基のうち、139号墳は形態が前方後円墳の可能性をもつことが判明するなど、貴重な発見となった。また古墳数の139基は県内最大の群集墳であるとともに保存状況が良好なこともあって、県内外の注目を得たことは言うまでもない。

同会は、昭和53年4月～5月に加藤、手塚、茨木を中心に戸塚山山頂の3基の古墳群を対象とした測量調査を行い、前方後円墳1基、帆立貝式古墳2基を確認、急速に戸塚山古墳群の重要性を認識するに至ったのである。さらに昭和57年5月米沢市教育委員会による137号墳発掘調査において東北初の女性人骨の発掘と全国的に注目されるものとなったのである。

この一連の重要成果をかんがみ米沢市では戸塚山に分布する古墳群の数量把握や精密な分布状況を図るために、国の国庫補助をうけて初の重要遺跡詳細分布調査『戸塚山古墳群分布調査』を実施するに至ったのである。

分布調査は、古墳群が集中する南山麓、斜面を中心に西、東斜面と山陵を調査対象に2ヶ月間予定したが、浅川堤入の北斜面に中世のものと推測される塚群及び、廃寺関係遺構が新たに発見されたこともあって中世遺構に関しては、略図にとどめることにした。

Ⅱ 戸塚山周辺の遺跡と地形

戸塚山は、米沢市街地北東端の萩の森、森合、金ヶ崎、上浅川のほぼ中央に位置する。平面形状が、角の丸い三角形を有する周囲6km、標高356mの独立丘陵は付近の赤肌をさらす丘陵とは対象的に緑にあふれ、一層の新鮮味を感じさせてくれる。

この山陵は、新第三紀中新世の頁岩、凝灰岩、集塊岩と同時代の花崗岩によって基盤をなし、頁岩、凝灰岩、集塊岩は東南部から西南部にかけての帯に多く、一方花崗岩は北西部を主体に存在し、岩石群の中でも頁岩と凝灰岩がさらに中心をなす。また上郷地区の東方山稜一帯も同様に新第三紀中新世の凝灰岩に分類され、同基盤層は高畠町から南陽市の大半にかけて分布する。

平野部は、戸塚山を中心とした場合、南方から東方に開けた上新田、長手、木和田周辺と、西側一帯は、青灰褐色シルト層が基盤をなす。これに対して東方から北方に開けた押出、浅川、下新田付近一帯は、天王川の氾濫による砂利層、礫層を中心に両者とも第四紀沖積層の堆積層で覆われている。

次に、戸塚山を中心とした戸塚山古墳群、中世遺構等に係わる東西3km×南北3kmの範囲を選出し分布する遺跡群について説明を加えたい。なお、戸塚山に分布する各支群の古墳及び中世遺構については、別項で詳しく述べるので省略し、以下各遺跡群の分布状況を地形や歴史的背景等を吟味しながら報告に入る。

この範囲の遺跡は、現在50ヶ所を数え、年代別に列挙すると、縄文時代3遺跡、古墳時代16遺跡、奈良～平安9遺跡、中世22遺跡が確認されている。しかしこの地域は、圃場整備等の事業がすでに終了していることから未調査の部分が、多々あるものと予想される。遺跡の数量が今後、戸塚山古墳群の集落把握とも合わせて増加することは、十分に考えられる。

次に各遺跡についての概要を述べる。(詳細は第1表参照)

縄文時代の遺跡群は、戸塚山山麓に集中する。縄文前期の遺跡であるNo15は西山麓、羽黒川河岸段丘上に立地する。(現在この地区は、羽黒川支流の馬橋川が北流しているが、両岸の段丘が未発達なことから縄文時代以降に形成された河川と理解したい。)No17は縄文中期の遺跡で、現在東方を北流する天王川によって形成された段丘に位置していたことが前述した地質からわかる。このように戸塚山山麓は、5500年前～4500年前には人々が生活を営んでいた。

古墳時代は、戸塚山の9支群 (No32, 33, 327, 36, 29, 37, 39, 35, 34) をはじめ、戸塚山南方の低丘陵地帯の堂田、薬師山、(この2ヶ所は昭和45年以降、土砂採掘によって削平され、堂田は全面的に、薬師山は3分の2を失なう。)とくに注意したいのは堂田古墳群で、削平以前の(昭和34年)航空写真を観察した結果、南北に長軸が延びるひょうたん形を有す比高差9mの丘陵の南端に、人工的な築造とも考えられる前方後方墳的な盛り上がりが見られ注目したい。薬師山古墳群No320、西光寺古墳群No322、皇大神社古墳群No321は、いずれも戸塚山古墳群近辺に分布する古墳群であり、

堂田古墳群以外は全て終末期の形態を有す。

これらの古墳群以外では、No 9, 3, 214が確認されている。No 9の天神裏古墳は、長手から押出に延びる丘陵北端部西麓に1基だけ存在する。No 3の長手古墳群は、戸塚山古墳群周辺以外の唯一の群集墳の性格を呈し、9基の円墳が、通称館山の南山麓に分布する。出土遺物としては、2号墳の羨道、羨門から内黒土師器3点（その中の1点に「十」と漆で底部に示す）須恵器杯1点、須恵器蓋1点がある。No 214の木和田古墳は、古館山より木和田に延びる舌状山地の南山麓にあり、昭和33年頃、ブドウ園に造成した際に発見された。形状は、長径8mの円墳であったが、現在は崩れて原形を失っている。出土遺物は横穴式石室から長頸壺の須恵器、鉄製直刀（約70cm）2本、鉄鎌約10本、土師器杯10点がある。以上の古墳群は、羽黒川東方の独立丘陵や山麓に分布が限定され、米沢市では羽黒川西方にかけての地域に古墳をみだすことはできない。

奈良、平安の遺跡群は、戸塚山を内包する様に分布し、とくに平野部でも微高地や河岸段丘を選定し、米沢市では上郷地区に最も多く集中している。このことは、戸塚山古墳群を含む古墳群と密接な係わりをもつ集落構成として把握できる。

分布状況は、羽黒川河岸段丘に位置するNo 24, 323, 13, 23, 梓川の北川左岸No 20, 14, 平野部の戸塚山東南部に位置するNo 326, 19, 18の3地域にその中心的分布をみる。この分布状況から天王川流域の中谷地、中村を経て、荒屋敷に至る線上は、遺跡の有無からも当時としては天王川の氾濫地帯と理解される。これらの遺跡群については、現段階では調査不十分であり今後の調査を待たなければならないが、着目される堂田遺跡について簡単に触れておく。この遺跡は、戸塚山南方に位置し現在は開田されたが、以前は建物跡の区画や井戸跡等の遺構が確認された地域であると共に、現在の大字境線が交差する地区であり、これらの状況から当地を官衙的な遺跡とも考えられるがこの根拠はまだない。ちなみに交差する大字名を明記すると西側が上新田地区、北方が上浅川地区、東方は長手地区、南側が木和田となっている。

この時代の唯一の窯跡は、先述した木和田古墳（No 214）の東方約30mに奈良時代前半の木和田窯跡（No 215）がある。昭和46年に発見された県内最古の地下式登窯の形態を有す。

中世遺跡群としては、戸塚山の塚群No 332, 331, 329, 328, 庵寺跡No 333, 330館跡No 27がある。これ以外では、丘陵や山頂に点在する館跡が最も多く、11ヶ所、塚群2ヶ所、石造物1ヶ所が確認されている。館跡については、立地状況から次の2つに大別できる。No 26, 325, 335, 255, 336は独立丘陵や舌状山陵を利用しているものと、河岸段丘や微高地に築造されたNo 12, 25, 4がある。形態も2種類に大別でき、空濤や土壘が全周するものと、片袖形態であり、前者は丘陵や山頂に築造された遺跡群に多く、後者は河岸段丘、微高地のいわゆる平野部の館跡に認められる傾向がある。No 338は、長手天満神社西南の社務所裏通路、畑中にあり、総高2.18mを有す。周囲の状況から、経塚に建てられた供養塔の可能性がある。



第1図 戸塚山古墳群と周辺の遺跡分布図(縮尺2万分の1)

第1表 戸塚山周辺の遺跡地名表

米沢市 跡目番号	遺跡名	所在地	立地	遺跡の状況	面積約㎡	種別	出土遺物	年代
No. 16	戸塚山幼稚園遺跡	米沢市大字上新田字金ヶ崎	河原段丘	水田、宅地	15,000	墓塚跡	銅片、石蓋	縄文前期
17	上茂川A遺跡	米沢市大字茂川字斐人	山麓	水田、畑	45,000	墓塚跡	土器片、石瓦、銅片	縄文中期
15	森合遺跡	米沢市大字上新田字森合	山麓	水田、山林	22,500	墓塚跡	銅片	縄文
32	金ヶ崎古墳群	米沢市大字上新田字金ヶ崎	山麓	山林	45基	古墳群		終末期古墳
33	飯塚北古墳群	米沢市大字上新田字飯塚	山麓	山林	74基	古墳群		終末期古墳
34	飯塚南古墳群	米沢市大字上新田字飯塚	山麓		49基	古墳群		終末期古墳
327	森合西古墳群	米沢市大字上新田字森合	山麓	山林	3基	古墳群		終末期古墳
35	森合東古墳群	米沢市大字上新田字森合	山麓	山林	4基	古墳群		終末期古墳
29	上茂川斐人B古墳群	米沢市大字茂川字斐人	山麓	山林	5基	古墳群		終末期古墳
27	上茂川斐人A古墳群	米沢市大字茂川字斐人	山麓	山林	2基	古墳群		終末期古墳
36	山頂古墳群	米沢市大字茂川	山頂	山林	7基	古墳群		後期古墳
38	山頂古墳群	米沢市大字茂川	山頂山麓	山林	4基	古墳群	人骨、埴輪、刀子	中期～後期古墳
320	藤崎山古墳群	米沢市大字上新田字森合	山麓	山林、原野	15基	古墳群		終末期古墳
321	皇大神社古墳群	米沢市大字上新田字森合	山麓	山林	2基	古墳群		終末期古墳
322	西北寺古墳群	米沢市大字上新田字森合	山麓	山林、墓地	不明	古墳群		終末期古墳
377	堂田古墳群	米沢市大字茂川字堂田	丘陵平地	水田	不明	古墳群		後期～終末期古墳
9	天神堂古墳群	米沢市大字長手字天神堂	山麓	山林	1基	古墳		終末期古墳
3	長手古墳群	米沢市大字長手字川西	山麓	林	9基	古墳	須恵器、甕杯	終末期古墳
214	水廻り古墳	米沢市大字水廻り字月の原	山麓	畑、栗樹園	1基	古墳	鉄剣、須恵器	終末期古墳
14	下新田A遺跡	米沢市大字下新田	河原段丘	水田	1,500	墓塚跡	須恵器片	奈良～平安
18	上茂川B遺跡	米沢市大字茂川字斐人	隆高地	水田	14,700	墓塚跡	須恵器、木器片、古銅器	奈良～平安
19	堂田遺跡	米沢市大字上新田字堂田	隆高地、平地	水田	84,000	墓塚跡		奈良～平安
14	上新田遺跡	米沢市大字上新田	河原段丘、自然堤防	畑、水田	29,400	墓塚跡	土師器片	奈良～平安
326	上野遺跡	米沢市大字川舟字上野	平地	水田、畑、宅地	2,100	墓塚跡		奈良～平安
323	西の原遺跡	米沢市大字上新田字西原	隆高地	畑	10,000	墓塚跡		奈良～平安
13	樋台遺跡	米沢市大字上新田字中樋	河原段丘	原野、畑、林	9,000	墓塚跡	土師器片	奈良～平安
23	金ヶ崎遺跡	米沢市大字金ヶ崎	河原段丘	原野、畑	16,000	墓塚跡		奈良～平安
20	葦原字校東遺跡	米沢市大字下新田	河原段丘	畑、宅地	8,800	墓塚跡		奈良～平安
215	木廻り宮跡	米沢市大字水廻り	山麓	畑、栗樹園	1基	古墳跡	須恵器片	奈良
27	戸塚山麓跡	米沢市大字茂川字斐人	戸塚山山麓	山林	7,800	城跡跡		中世
2	長手城跡	米沢市大字水廻り字古郷部	山麓	山林	4,000	城跡跡		中世
326	古崎神社城跡	米沢市大字水廻り字古郷部	丘陵	山林	20,800	城跡跡		中世
325	古郷部城跡	米沢市大字水廻り字古郷部	山麓	山林	16,000	城跡跡		中世
324	崖山城跡	米沢市大字川舟字郷町	山麓	山林	25,600	城跡跡		中世
255	森城跡	米沢市大字川舟字森	山麓	山林	6,000	城跡跡		中世
25	森合城跡	米沢市大字上新田字森合	山麓	山林	1,200	城跡跡		中世
4	岡の台城跡	米沢市大字長手字岡の台	山麓、河原段丘	原野、林	5,400	城跡跡		中世
328	三合目城跡	米沢市大字上新田字金ヶ崎	平地	水田	8,000	城跡跡		中世
329	飯塚城跡	米沢市大字上新田字飯塚	丘陵	森林	300	城跡跡		中世
12	樋台城跡	米沢市大字上新田字樋台	河原段丘	原野	22,400	城跡跡		中世
25	下茂川城跡	米沢市大字下茂川	河原段丘	原野、林野	6,400	城跡跡		中世
333	飯塚南寺	米沢市大字上新田字森合	山麓、河原段丘	杉林、原野、水田、林	2,430	廃寺跡		中世
320	斐人廃寺	米沢市大字茂川字斐人	山麓、丘陵	山林	7,800	廃寺跡		中世
332	萩の森塚群	米沢市大字茂川字萩の森	山麓、丘陵	山林	不明	塚群		中世
331	斐人東塚群	米沢市大字茂川字斐人	山麓、丘陵	山林	33基以上	塚群		中世
329	斐人西塚群	米沢市大字茂川字斐人	山麓	山林	76基以上	塚群		中世
328	小山塚	米沢市大字茂川	山麓	山林	1基	塚		中世
266	中谷地北塚群	米沢市大字井字中谷地	山頂山麓	山林	1基	塚群		中世
267	中谷地南塚群	米沢市大字井字中谷地	山頂山麓	山林	1基	塚群		中世
338	上茂川神社遺跡	米沢市大字長手字下川原	河原段丘	神社の境内	1基	石塔		中世

Ⅱ 調査の経過

戸塚山は全体の3分の2が広葉樹林、3分の1が針葉樹林の樹林で占める。特に南斜面にかけては広葉樹林がうっそうと密集し、春夏にかけて深緑が増すことから分布調査は、できるだけ視界のいい期間を選出し、萌芽前後の4月1日～4月30日と落葉後の11月5日～12月15日の2回に亘って調査を実施することにした。そして前者の4月を古墳の数量把握と古墳登録、破壊状況を探査するための分布調査、後者の11月、12月は分布調査を基にした各古墳群の測量調査に分けて進める方法をとった。以下簡単に調査の概要を述べる。

1. 分布調査

これまでに確認した古墳の存在等から、古墳が最も多く集中するとみられる南山麓斜面を中心に西山麓、東山麓、同両斜面、それに各山陵を対象に4月1日から開始する。昭和50年の分布調査によって発見された139基の分布資料を基にして、戸塚山の西から金ヶ崎地区、飯塚地区、森合地区、萩の森地区、上浅川堤入地区、山崎地区の6区に分け、古墳の確認と確認された古墳については、ボーリング探査による古墳の状況、破壊の有無、形態、規模等できるだけ記録し、最後に古墳登録標識を各古墳に明記することにし、4月1日～4月8日を金ヶ崎地区、4月11日～4月20日の10日間を飯塚地区、4月21日～4月26日の6日間を森合地区、上浅川堤入～山崎にかけての浅川地区を含めた一帯を4月27日～4月30日とのべ4日間を要し、戸塚山全体で現存する古墳193基、完全破壊古墳26基（推定）を確認するに至った。

なお、分布調査と平行して、地元の地権者の方々及び古老等からの聞き取り調査も加えて行い多くの有意義な話を賜わった。その中には、先に菊地が触れている様に昭和45年頃に破壊された堂田古墳群、一部現存し今回確認された薬師山古墳群と森合山山麓西と同南山麓にも古墳群が発見され、戸塚山以外の小独立丘陵にも古墳が存在することは、戸塚山を中心とした古墳文化究明にとっても貴重な成果となろう。

2. 測量調査

分布調査の結果、金ヶ崎古墳群、飯塚北 飯塚南古墳群、森合西、森合東古墳群、上浅川A、上浅川B古墳群、山崎古墳群、山頂古墳群の9古墳群、193基の古墳が検出されている。各古墳群については後に詳しく述べるが、各古墳群の古墳分布を網羅する様に2千分の1の地図上で古墳分布範囲（以下古墳範囲）を設定、各古墳群の古墳範囲に沿って縮尺250分の1の地形図を作成することにした。ただし、山崎古墳群に関してのみ重要度を考慮して、縮尺を100分の1とした。

測量は磁北を基準線とした、トラバース測量を行うことにした。トラバース測量は、各古墳範囲に適度な測量基準点（以下基点）を設け、最少単位の誤差でとどめるために基点の配置は十字トラバースを採用する。すなわち、各基点の移動は90°を基本に基点間の距離は斜距離で1～30mとm単位で定め、基点間の比高差と斜距離から $\sqrt{(\text{斜距離}-\text{比高差})(\text{斜距離}+\text{比高差})}$ ＝平

行距離を割り出す方法を取り、基点の記号は「T」を用いた。

また各古墳群の測量は古墳群ごとに行うことを前提としたが、飯塚北南古墳群に関しては一つの古墳範囲として測量上扱った。なお各古墳群別の古墳範囲、基点数は金ヶ崎古墳群、南北260m 東西170m、T148～T200、計53基点、飯塚北、飯塚南、南北410m、東西200m、T1～T147、計147基点、森合西120×70m、T201～T208、計8基点、森合東、南北80m、東西100m、T209～T216、計8基点、上浅川A、南北40m、東西65m、上浅川B、南北60m、東西70mと中世塚M187号、295号を含めT1～T28、計28基点なる。

ただし、山頂古墳群に関してはすでに昭和53年にまんぎりが測量した精密な測量図が完成していることから今回は除外した。

測量の手順としては、飯塚北、南古墳群から着手、トラバース基点の設定及び平行して、立木伐採作業を11月5日～11月9日の5日間を用い、次いで、飯塚北より平板測量に入り11月10日～11月22日に同南古墳群終了。11月23日～11月25日を金ヶ崎のトラバース設定、11月26日～11月29日まで平板測量を行なった。11月30日には森合西、同東のトラバースを設定、12月1日、2日の2日間で平板測量を終了。12月3日頃から急速に降雪が多くなり、作業が困難となったため12月3日～12月6日の山崎古墳からは、トラバース設定と平板測量を平行する方法をとった。

最後に上浅川A、上浅川BとM187号、M295号のトラバースを配する段階で、堤入廃寺跡とテラス状の建物跡整地地面を発見し、さらにこれまで考えられなかった北斜面に目を向けると数多くの塚群が検出された。

すでに降雪も20cmに達しており、塚群の調査は断念せざるをえないと考え、とり合えず分布状況と数量把握、標識の記入までを、調査不能と判断する12月15日まで行うこととし、上浅川A・B両古墳、M187、295号塚の測量調査を菊地、塚群の調査を亀田、手塚が実施することにした。塚群については、後の亀田の報告に詳しいが、3ヶ所に亘って分布することが判明しているのにもかかわらず、堤入西塚と堤入東塚群、それに小山塚を加えた94基を確認することとなり、確実に塚の存在が認められる萩の森塚群に関しては、断念せざるを得なかった。

3. 戸塚山古墳群と中世遺構

戸塚山に分布する遺構のうち、塚群、廃寺関係遺構、館跡は一括し中世遺構とし、それに古墳を大別して考える。更に古墳と中世遺構は、分布状況の吟味により下記の様に統一することしよう。

a 古墳群

- | | | |
|-----------------|-----------------|-----------------|
| 1) 金ヶ崎古墳群 (45基) | 2) 飯塚北古墳群 (74基) | 3) 飯塚南古墳群 (49基) |
| 4) 森合西古墳群 (3基) | 5) 森合東古墳群 (4基) | 6) 山頂古墳群 (4基) |
| 7) 上浅川A古墳群 (2基) | 8) 上浅川B古墳群 (5基) | 9) 山崎古墳群 (7基) |

b 中世遺構

- | | | |
|------------------|----------------|----------------|
| 1) 萩の森塚群 (50基以上) | 2) 堤入東塚群 (75基) | 3) 堤入西塚群 (19基) |
| 4) 小山塚 (1基) | 5) 飯塚廃寺 | 6) 堤入廃寺 |
| 7) 戸塚山館 | 8) 森合廃寺関連遺構 | 9) 堤入廃寺関連遺構 |

以上確認された遺構だけでも338基をなす。さらに、萩の森塚群を加えるとその数はまだまだ増すと考えられる。しかも中世遺構に関しては、詳細な調査を行っていないこともあって、様々な課題が多い。

この点を考慮した上で、古墳群と中世遺構について更に詳しく触れることにする。

Ⅳ 古墳群〔第3図～第9図〕

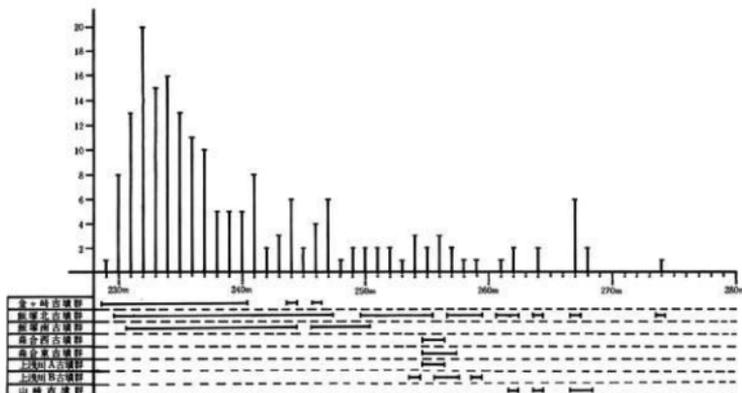
今回確認された古墳は、193基を数える。主に戸塚山の南山麓を中心に分布するものであり、大半が横穴式石室を有する終末期の古墳が多く、地形的な分布状況から9ヶ所のグループに分けられることは、先述の通りである。

各古墳群については、1. 古墳分布と標高 2. 古墳の規模 3. 古墳の状況 4. 古墳の形態 最後に戸塚山古墳以外の周辺の古墳に分けそれぞれ説明を加えたい。

1. 古墳分布と標高

最初に古墳が構築された標高を分類してみると、標高229mの金ヶ崎古墳群「M11」が最も低く、標高356mの山頂古墳群「M139」とは、実に127mの標高差をもつことになる。最高位に位置する山頂古墳群は、他の古墳群と比較すれば、例外的に高いことから、山頂古墳群を除く8古墳群についてさらに分類したのが第2表である。縦軸が古墳数量、横軸が標高を示した。

第2表 戸塚山古墳標高類別表



この表によると、標高229mから232mにかけて急速に多くなり、次第に240mにかけて少なくなり、標高241m～247mで、2基～8基位のバラツキがみられる。標高248m～264mにかけて1～3基と平行線をたどり、空間をはさんで標高268m～267mに7基、さらに空間をもって標高274mで1基が存在し、この標高274mが最高位に位置することになる。

更に各古墳群がどの位置に分布するかを表わしたのが下の表であり、金ヶ崎古墳群は、標高229m～240mにかけて、顕著に分布し、やや空間を持ちながら244、246mに若干分布する。飯塚北古墳群についてみると、標高230m～247mにかけて中心的分布がみられ、若干の空間を持たせながら標高250m～255m、257m～259m、261m～262m、264m、267mで最高位の標高274mと、金ヶ崎古墳群にみられるような230m～240m前後に主体を置きながらも標高274mの間に分布する特徴を持つ。飯塚南古墳群もやはり標高231m～250m内に全ての古墳が収まっている。

次に、小規模古墳群である森合西、森合東、上浅川A、上浅川B、各古墳群について述べる。標高254m～259mと間隔が狭い内に構築されていることがわかる。この点は、山崎古墳群についても同様であり、標高262m～268m内に収まっている。

以上の古墳分布状況からみて、幾つかの特徴的グループに細別することも可能である。最初のグループとして、短期間もしくは、ある一定の被葬者的な集団古墳群を有するもの、森合西、森合東、上浅川A、上浅川B、各古墳群が、このグループに加わりとみてよい。

第2のグループとして、幾つかの政治的集団（必ずしもこの表現は適切ではないと考えるが）的な墳墓で、短期間に築造されているグループ、金ヶ崎、飯塚南の両古墳がこのグループに属することが考えられる。

更に第3のグループとして、先の第2グループからある程度長期にわたって古墳構築が行なわれたグループ、飯塚北古墳群がこのグループに加わるものとみられるが、但し標高230m～250mと標高250m～270mの2区に区分して第1のグループと、第2のグループに大別することも可能であるが、ここではあくまでも、第3のグループとして考えておきたい。

最後として、時期的に古くかつ地方政治集団の頂点的な領域内に構築されるグループ、山頂古墳群及び、山崎古墳群がこのグループに加わる。

ちなみに戸塚山全体の古墳分布から、標高229m～250m前後を、第1のグループ、標高255m前後～274mに分布する第2グループ、更に標高320m～356mの所謂山頂古墳群を第3のグループと分類することも可能であるが、結論は今後の課題としておこう。

2. 古墳の規模

この項では、確認された古墳193基について古墳の大きさを分類し、各古墳の特徴を探したい。古墳の規模（企画）は、これまでの研究によって、年代的にある一定の尺度を持ちいて考えるのが一般的であるが、戸塚山古墳群の場合、破壊を受けた古墳や周溝等の有無から必ずしも適切な墳

麓線を把握できないこともあって、適応させることは今回は避け、m単位の数字で細分し、全体的な分布状況を考えてみることにする。

第1のグループとして4m未満の最小規模を有する古墳をa類とする。

第2のグループとして5m～6m未満を有する古墳をb類とする。

第3のグループとして6m～7m未満を有する古墳をc類とする。

第4のグループとして7m～8m未満を有する古墳をd類とする。

第5のグループとして8m～9m未満を有する古墳をe類とする。

第6のグループとして9m～10m未満を有する古墳をf類とする。

第7のグループとして10m～11m未満を有する古墳をg類とする。

第8のグループとして11m～12m未満を有する古墳をh類とする。

第9のグループとして12m～13m未満を有する古墳をi類とする。

第10のグループとして13m～15m未満を有する古墳をj類とする。

第11のグループとしては、16m以上を有する古墳全てをk類とする。

これらを基に各古墳群の割合を述べると次のようになる。

第3表 戸塚山古墳群計測類別表

古墳群別 計測分類	金ヶ崎	飯塚北	飯塚南	森合西	森合東	山 頂	上浅川A	上浅川B	山 崎	合計
a 類	0	0	6	0	0	0	0	2	0	8
b 類	4	5	8	0	0	0	0	1	0	18
c 類	4	3	8	0	2	0	0	0	0	17
d 類	8	10	10	0	0	0	0	0	0	28
e 類	10	12	6	1	0	0	0	2	1	32
f 類	6	20	6	0	0	0	0	0	1	33
g 類	5	7	3	1	0	0	1	0	0	17
h 類	4	11	1	0	0	0	0	0	0	16
i 類	1	5	1	1	0	0	0	0	0	8
j 類	2	0	0	0	2	1	1	0	2	8
k 類	1	1	0	0	0	3	0	0	3	8
合計	45	74	49	3	4	4	2	5	7	193

この表からも言える様に、戸塚山古墳群における古墳の築造はb類～h類にかけて最も多く古墳が存在していることが指摘される。中でもd類～e類、f類の7m～9mにかけては、さらに顕著であり、戸塚山全体の約半数である93基を占める。

数的には極端に少ないのがa類とi～k類の4類であるが、先のa類は飯塚南古墳群で6基を

確認するなど、各古墳群の分布の特徴が現われている。

また j 類, k 類の古墳も同様で主体的な分布は山頂古墳群, 山崎古墳群に多く存在し, 先の古墳分布と標高でも触れたように各古墳の特徴が規模においても対比できそうである。

3. 古墳の状況

今現在存在する193基の古墳と, これまでに破壊を受けて消滅した古墳を推測することによって戸塚山古墳群全体の数量把握と現存する古墳の保存状況を述べてみる。

(1) 消滅古墳

これまでに開発行為によって破壊消滅した古墳は, 約30基程度と推測する。開発状況から圃場整備とブドウ園増築に伴う破壊行為によるもので, 両者とも重機によって跡形もなく消滅されるに至った。

圃場整備に関しては, 森合西古墳群から森合東古墳群の南山麓にかけてのものであり, 山麓の土砂を削除して圃場整備の埋め立てに利用し, 現在は山麓沿いに農道がはしり, 当時の面影を見出すことはできない。現在両古墳群は, 7基の他に10基位の古墳が存在したという。更にその中には, 直径30mに及ぶ大形円墳があったともいわれる。

ブドウ園造成に関わる破壊は, 飯塚北古墳群の中央部山麓部分, 60m×40m, 2400㎡の範囲が重機によって破壊されている。(昭和30年代に破壊されたものとみられる。) 飯塚北古墳群は, 戸塚山古墳群の中でも最大規模を誇るもので, これ迄に74基が現存しており, その分布状況と破壊された空間との吟味から, 15~20基相当が消滅したと推測される。

また, 金ヶ崎古墳群の南山麓裾の原野及び畑に数基存在したといわれるが, 有力な情報を得ることができなかった。よってこれらの破壊古墳の具体的な数量は不明といわざるを得ないが, 最低, 30基を下らないといえよう。

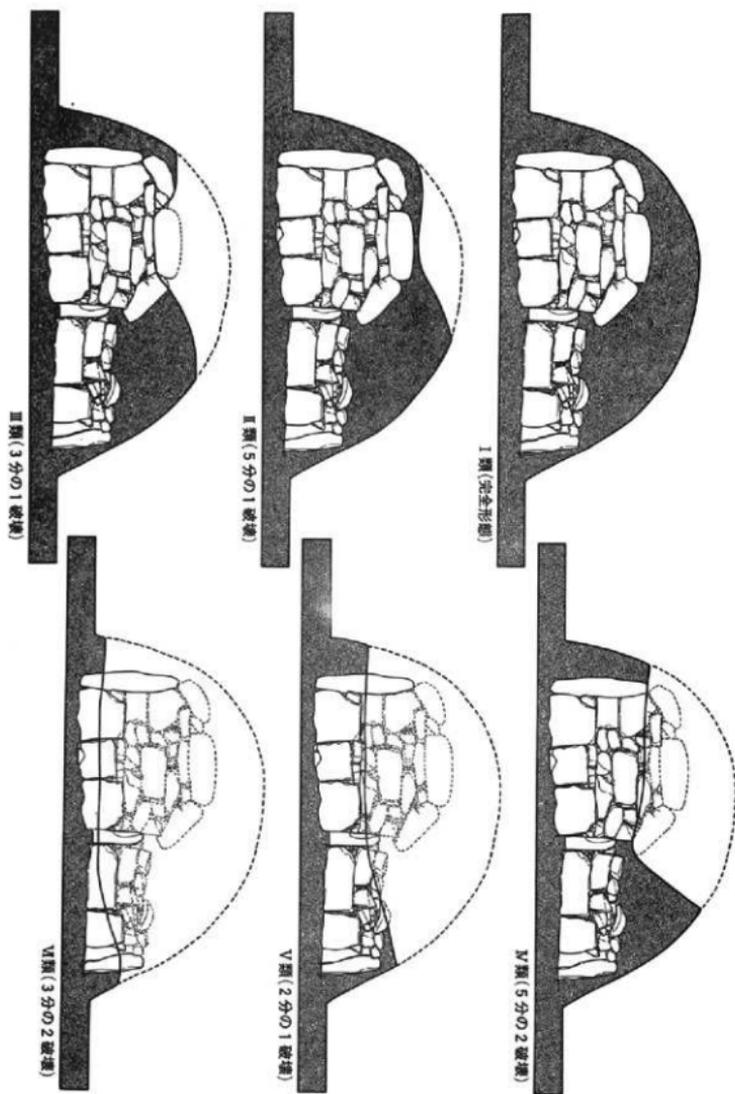
ちなみに, 現存する193基, それに30基を加えると223基になり東北でも屈指の大古墳群といえよう。

(2) 現存する古墳の状況

今回確認された193基の古墳は, 全てが無傷で存在しないことはすでに指摘した通りであるが, その破壊状況及び数量を明確にすることによって, 今後の保存整備, 調査の基本的資料としたい。

多少の破壊を受けた原因は, 全て盗掘によるものであり, その破壊状況から次の形態に細別する。なお, 破壊状況を明確に理解するために横穴式古墳を代表に模式化して第2図に分類基準を設定した。

- 1) ほとんど完全形で確認されたもの, 完全形態としてⅠ類とする。(74基)
- 2) 盗掘の目的で掘り下げたが, 蓋石に到達しないで断念したものをⅡ類とし, 5分の1破壊古墳とする。(25基)



第2図 戸塚山古墳破壊状況概念図

- 3) 盗掘によって蓋の一部を剥離し、内部に侵入した可能性及び副葬品の持ち出しを行なったものをⅢ類とし、3分の1破壊古墳とする。(58基)
- 4) 天井石の全てを取りはずし石室内の副葬品を物色したものをⅣ類とし、5分の2破壊古墳とする。(18基)
- 5) Ⅳ類から更に羨道部にかけて破壊され物色されたものをⅤ類とし、2分の1破壊古墳とする。(9基)
- 6) 石室の大半と羨道部の全てが盗掘によって露顕し完全破壊に近い状況を示すものをⅥ類とし、3分の2破壊古墳とする。(9基)

この基準を適用し、各古墳の破壊状況を示したものが次の表となる。

第4表 戸塚山古墳破壊状況分類表

古墳群	金ヶ崎	飯塚北	飯塚南	森合西	森合東	山 頂	上浅川A	上浅川B	山崎	合計
Ⅰ 類	23	15	21	1	2	2	0	3	7	74
Ⅱ 類	2	10	11	0	1	1	0	0	0	25
Ⅲ 類	9	35	9	1	1	0	1	2	0	58
Ⅳ 類	5	9	2	1	0	0	1	0	0	18
Ⅴ 類	3	1	4	0	0	1	0	0	0	9
Ⅵ 類	3	4	2	0	0	0	0	0	0	9
合 計	45	74	49	3	4	4	2	5	7	193

以上のことから、なんらかの破壊を受けた古墳は119基を数え全体の60%を占める。但し、Ⅱ類に関してはごく一部の破壊に止どまっていることから、完全形態の範疇にとどめ、Ⅲ類からⅥ類にかけての保存措置、復元が急務となろう。特にⅢ類、Ⅳ類は天井が開口していることから長期にわたる降雨、降雪のため内部が著しく浸食を受けていることは必然であり、発掘による調査と保存整備が一刻も早く必要とされる。もちろん更に破壊を受けたⅤ類、Ⅵ類はいうまでもない。

4. 古墳の形態

これまでに古墳の規模及び分布状況、保存状況について述べてきたが、ここではさらに各古墳の形態について触れてみる。193基の古墳を形態的に分類すると円墳186基、方墳4基、帆立貝式古墳2基、前方後円墳1基に分けられるが、さらにその細分は可能であり、詳細は後日の調査を待つことにして、次に各古墳形態について説明を加える。

(1) 円墳

戸塚山古墳群の約96%を占めるなど殆どの古墳がこのグループに加わる。中でも山崎古墳群のM181号墳は主軸長が24m、飯塚南古墳群のM195号墳は3.2mでその上下の差は大きい。円墳はさらに主体部の構築状況から竪穴式と横穴式の2つに分けることができ、前者の山崎古墳群のM177号

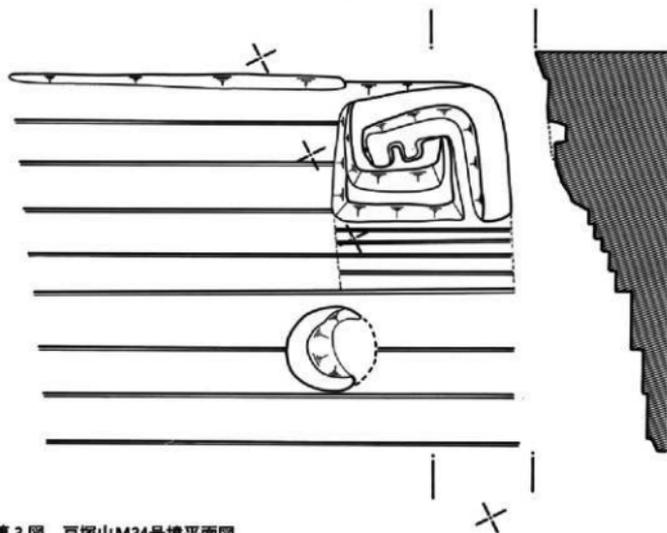
墳～M181号墳，M183号墳の6基はこのグループに加わる。また墳丘の形態より墳頂部が平坦でかつ低いグループ，M180号墳，M181号墳と墳丘が土まんじゅう状の形状を有するものM177号墳～M179号墳，M183号墳の2つに細分することも可能である。

後者の横穴式古墳群は構築する立地によって異なり，斜面に構築するものは，山寄せ式を採用し山側に周溝を有するものと斜面を削除して墳丘を形成するものがある。一方山麓裾から平担部分に構築する古墳群は50cm～2m位の全周する周濠が巡る特質があげられる。しかし内部構造，年代については大きな相違はない。

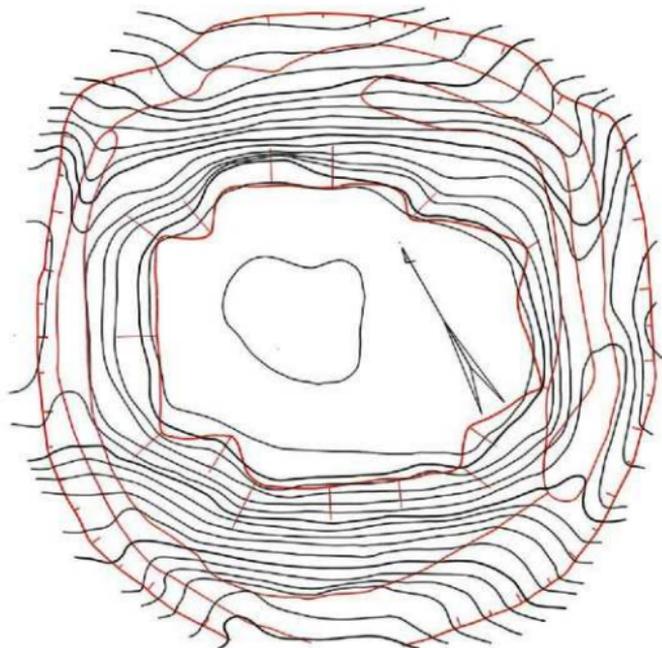
(2) 方墳

金ヶ崎古墳群のM188号墳，M34号墳，山崎古墳群のM182号墳，山頂古墳群のM140号墳の4形態が方形を示すことから方墳の仲間として扱っているが，それぞれの形態が異った特徴をもつ。特に金ヶ崎古墳群のM34号墳については，南北36.5m東西28mのややねじれた長方形プランを示す範囲に3m～4mの間隔に沿って8段の石段を構築して，その南東コーナーに石積による2段構築の方墳を設置した特異な形態を示す。主体部は横穴式石室を採用し内部は玄室が複室となる前室と後室に分かれ，南北軸にした玄室から1m位の羨道がのびている。さらに羨門から西にかけて直角に溝を配し墓道的な施設をもつ。

山頂古墳群のM140号墳は一辺16mを有し墳頂が平坦で低く，墳頂の四方が突起するような(コ



第3図 戸塚山M34号墳平面図



第4図 戸塚山M140号墳測量図(縮尺150分の1)

一ナ一部分がくびれている)形態を示す。

金ヶ崎古墳群のM188号墳は11m×6.5mの正方形プランを示すもので、斜面にテラス状に飛び出したような形状を示し、古墳かどうかの判定はむずかしい。同様に山崎古墳群のM182号墳は山陵突端部に張り出すように構築したもので一辺14mの正方プランをなし、北辺の周溝の一端に空間をもつ。

(3) 帆立貝式古墳

昭和53年の山頂古墳群調査で確認したものであり、M137号墳とM138号墳の2基がある。M137号墳は主軸長24m、後円径21m、前方長3m、前方幅9mの2段構築によるものであり、M138号墳の周溝を切って築造されている。このことはM138号墳が先に構築されたものであり、M138号墳は主軸長15m、後円径13.5m、前方長1.5m、前方幅6mとM137号墳の約3分の2の規模をもつ。

両古墳群は、すでに試掘及び盗掘がなされ、M138号墳は特に破壊が著しい。一方M137号墳は

昭和57年5月、6月に米沢市教育委員会が発掘調査を実施している。調査内容は調査報告書を参照されたい。

(4) 前方後円墳

戸塚山の最高位356.6mの頂点に後円部を置き、南東部に前方部が張り出す戸塚山最大の前方後円墳である。全長54m、後円径36m、前方幅27m、後円部の高さが4.5mの堂々たるもので、上田宏範氏の後円部を6とした場合の前方部長の比率は6:3で南陽市稲森古墳と同様な2:1の割合を示す。この規模、年代等々の分析は戸塚山第137号墳発掘調査報告書で加藤、手塚、亀田が詳しく述べていることから、ここでは触れておかない。

5. その他の古墳について

最後の項として戸塚山を除く周辺に分布する古墳群について簡単に触れておきたい。菊地の報告によると、No320の薬師山古墳群、No337の堂田古墳群、No322の西光寺古墳群、No321の皇大神社古墳群、No9の天神裏古墳、No3の長手古墳群、No214の木和田古墳の計5古墳群に2古墳の7ヶ所が存在する。

中でも戸塚山に隣接する薬師山、堂田、西光寺、皇大神社各古墳群は今回の分布調査によって新たに確認された古墳群であり、堂田、西光寺の両古墳群は土砂の運搬、墓地の新設により無残にも消滅したものである。地元の古老や地権者等の聞き取り調査によれば堂田は、山裾に10基位の10m前後の円墳が存在したと言われ西光寺は5基の円墳10m～15m前後があったと言う。特に堂田は当時小山と呼ばれた山陵の3分の2は、山頂古墳群の最大古墳M139号墳と同様もしくはそれ以上の古墳が存在したと云われ、昭和30年頃に米沢市で撮影した航空写真に墳丘を物語るような前方後方状の物体が捉えられている。しかし今ではその存在を確認するすべはない。ただし記録的な可能性もあり、吟味する必要がある。

次に薬師山は山陵の大半と南東部が今現在も埋め立て用の削平が続いており、これも十数基破壊されたという。ただし、くしくも北山麓から東山麓の一部にかけて円墳状の3m～5mの小規模古墳群15基を確認し、教育委員会は同古墳群の保存を関係機関と協議しご理解を賜っている。

皇大神社古墳群は森合山の南山麓に分布するものであり、円墳3基が確認され、規模としては薬師山と同様に5～6m前後の小規模円墳である。以上新たに4ヶ所の古墳群が戸塚山周辺の独立小丘陵にも存在することになり、今後くわしい調査の推移によってさらに増加する可能性もあり、重視していきたい。

第5表 戸塚山古墳群分布調査一覧表

金ヶ崎古墳群

通し番号	古墳登録番号	墳丘形態	主軸長(m)	主体部形態	標高(m)	古墳状況	分類
1	M1号墳	円墳	9.6	横穴式石室	234.068	I類	f類
2	M2号墳	円墳	9.0	横穴式石室	237.323	I類	f類
3	M3号墳	円墳	5.2	横穴式石室	240.938	I類	b類
4	M4号墳	円墳	11.0	横穴式石室	231.508	I類	h類
5	M5号墳	円墳	9.5	横穴式石室	231.088	Ⅲ類	f類
6	M6号墳	円墳	11.0	横穴式石室	231.513	Ⅳ類	h類
7	M7号墳	円墳	10.0	横穴式石室	234.413	Ⅲ類	g類
8	M8号墳	円墳	11.0	横穴式石室	235.233	Ⅳ類	h類
9	M9号墳	円墳	8.0	横穴式石室	234.183	I類	e類
10	M10号墳	円墳	6.0	横穴式石室	234.673	Ⅲ類	c類
11	M11号墳	円墳	5.0	横穴式石室	229.843	I類	b類
12	M12号墳	円墳	6.0	横穴式石室	234.773	I類	c類
13	M13号墳	円墳	7.5	横穴式石室	234.458	Ⅲ類	d類
14	M14号墳	円墳	8.0	横穴式石室	239.293	I類	e類
15	M15号墳	円墳	8.0	横穴式石室	234.578	Ⅲ類	e類
16	M16号墳	円墳	13.5	横穴式石室	236.493	V類	j類
17	M17号墳	円墳	7.0	横穴式石室	232.198	Ⅵ類	d類
18	M18号墳	円墳	8.0	横穴式石室	232.723	V類	e類
19	M19号墳	円墳	8.0	横穴式石室	231.643	I類	e類
20	M20号墳	円墳	8.0	横穴式石室	230.023	V類	e類
21	M21号墳	円墳	5.5	横穴式石室	230.013	I類	b類
22	M22号墳	円墳	12.5	横穴式石室	232.823	I類	i類
23	M23号墳	円墳	5.0	横穴式石室	235.9085	Ⅵ類	b類
24	M24号墳	円墳	7.0	横穴式石室	231.6105	I類	d類
25	M25号墳	円墳	8.0	横穴式石室	233.9785	I類	e類
26	M26号墳	円墳	10.0	横穴式石室	232.5285	I類	g類
27	M27号墳	円墳	7.0	横穴式石室	231.2255	Ⅱ類	d類
28	M28号墳	円墳	7.0	横穴式石室	230.8005	Ⅱ類	d類
29	M29号墳	円墳	10.0	横穴式石室	235.3485	I類	g類
30	M30号墳	円墳	8.0	横穴式石室	234.6285	Ⅲ類	e類

通し番号	古墳登録番号	墳丘形態	主軸長(m)	主体部形態	標高(m)	古墳状況	分類
31	M31号墳	円墳	10.0	横穴式石室	231.3755	I類	g類
32	M32号墳	円墳	10.0	横穴式石室	230.5005	III類	g類
33	M33号墳	円墳	8.0	横穴式石室	231.5855	IV類	e類
34	M34号墳	方墳	$\frac{12 \times 11}{36 \times 28}$	横穴式石室	244.8115	III類	k類
35	M35号墳	円墳	7.0	横穴式石室	238.6595	VI類	d類
36	M36号墳	円墳	7.0	横穴式石室	232.1355	VI類	d類
37	M37号墳	円墳	9.0	横穴式石室	232.5115	I類	f類
38	M38号墳	円墳	8.0	横穴式石室	230.5155	I類	e類
39	M39号墳	円墳	7.5	横穴式石室	230.6355	III類	d類
40	M40号墳	円墳	6.5	横穴式石室	230.961	I類	c類
41	M41号墳	円墳	6.0	横穴式石室	233.363	I類	c類
42	M42号墳	円墳	9.0	横穴式石室	239.058	I類	f類
43	M43号墳	円墳	13.0	横穴式石室	256.438	IV類	j類
44	M44号墳	円墳	9.0	横穴式石室	246.868	I類	f類
45	M188号墳	方墳(?)	11×6.5	不明	244.625	I類	h類

飯塚北古墳群

46	M45号墳	円墳	10.0	横穴式石室	231.8145	I類	g類
47	M46号墳	円墳	9.0	横穴式石室	240.239	III類	f類
48	M47号墳	円墳	9.0	横穴式石室	241.0745	I類	f類
49	M48号墳	円墳	7.0	横穴式石室	238.5545	IV類	d類
50	M49号墳	円墳	5.5	横穴式石室	236.5945	III類	b類
51	M50号墳	円墳	8.5	横穴式石室	235.0145	VI類	e類
52	M51号墳	円墳	8.0	横穴式石室	247.061	III類	e類
53	M52号墳	円墳	9.5	横穴式石室	241.1745	III類	f類
54	M53号墳	円墳	9.0	横穴式石室	241.6745	IV類	f類
55	M54号墳	円墳	9.0	横穴式石室	243.2585	III類	f類
56	M55号墳	円墳	8.0	横穴式石室	243.2485	IV類	e類
57	M56号墳	円墳	9.0	横穴式石室	246.396	III類	f類
58	M57号墳	円墳	7.0	横穴式石室	250.5315	III類	d類
59	M58号墳	円墳	5.0	横穴式石室	255.4265	VI類	b類

通し番号	古墳登録番号	墳丘形態	主軸長(m)	主体部形態	標高(m)	古墳状況	分類
60	M59号墳	円墳	11.0	横穴式石室	274.7285	Ⅲ類	h類
61	M60号墳	円墳	9.0	横穴式石室	267.501	Ⅲ類	f類
62	M61号墳	円墳	11.0	横穴式石室	267.0185	Ⅳ類	h類
63	M62号墳	円墳	9.0	横穴式石室	267.0485	Ⅱ類	f類
64	M63号墳	円墳	9.0	横穴式石室	262.6735	Ⅱ類	f類
65	M64号墳	円墳	11.0	横穴式石室	261.489	Ⅱ類	h類
66	M65号墳	円墳	11.0	横穴式石室	257.839	Ⅴ類	h類
67	M66号墳	円墳	7.0	横穴式石室	258.2765	Ⅱ類	d類
68	M67号墳	円墳	8.0	横穴式石室	264.131	Ⅱ類	e類
69	M68号墳	円墳	6.6	横穴式石室	257.1765	Ⅲ類	c類
70	M69号墳	円墳	7.0	横穴式石室	254.609	Ⅲ類	d類
71	M70号墳	円墳	11.0	横穴式石室	231.252	Ⅵ類	h類
72	M71号墳	円墳	6.0	横穴式石室	247.3015	Ⅰ類	c類
73	M72号墳	円墳	11.0	横穴式石室	253.619	Ⅱ類	h類
74	M73号墳	円墳	10.0	横穴式石室	247.789	Ⅰ類	g類
75	M74号墳	円墳	16.0	横穴式石室	252.089	Ⅰ類	k類
76	M75号墳	円墳	8.0	横穴式石室	246.7715	Ⅲ類	e類
77	M76号墳	円墳	7.0	横穴式石室	237.991	Ⅰ類	d類
78	M77号墳	円墳	5.0	横穴式石室	245.241	Ⅱ類	b類
79	M78号墳	円墳	9.0	横穴式石室	244.3785	Ⅲ類	f類
80	M79号墳	円墳	8.0	横穴式石室	242.0085	Ⅳ類	e類
81	M80号墳	円墳	12.0	横穴式石室	241.387	Ⅲ類	i類
82	M81号墳	円墳	9.0	横穴式石室	244.4435	Ⅲ類	f類
83	M82号墳	円墳	9.0	横穴式石室	245.2435	Ⅰ類	f類
84	M83号墳	円墳	10.0	横穴式石室	251.1585	Ⅲ類	g類
85	M84号墳	円墳	7.0	横穴式石室	251.6235	Ⅳ類	d類
86	M85号墳	円墳	9.0	横穴式石室	259.9835	Ⅰ類	f類
87	M86号墳	円墳	9.0	横穴式石室	252.6445	Ⅲ類	f類
88	M87号墳	円墳	8.0	横穴式石室	247.617	Ⅰ類	e類
89	M88号墳	円墳	9.0	横穴式石室	244.907	Ⅰ類	f類

通し番号	古墳登録番号	墳丘形態	主軸長(m)	主体部形態	標高(m)	古墳状況	分類
90	M89号墳	円墳	11.0	横穴式石室	240.887	Ⅲ類	h類
91	M90号墳	円墳	12.0	横穴式石室	241.207	Ⅲ類	i類
92	M91号墳	円墳	9.0	横穴式石室	237.907	Ⅱ類	f類
93	M92号墳	円墳	10.0	横穴式石室	236.792	Ⅲ類	g類
94	M93号墳	円墳	9.0	横穴式石室	237.892	Ⅰ類	f類
95	M94号墳	円墳	10.0	横穴式石室	232.7145	Ⅱ類	g類
96	M95号墳	円墳	11.0	横穴式石室	237.697	Ⅱ類	h類
97	M96号墳	円墳	10.0	横穴式石室	236.672	Ⅲ類	g類
98	M97号墳	円墳	10.0	横穴式石室	234.9095	Ⅳ類	g類
99	M98号墳	円墳	8.0	横穴式石室	234.242	Ⅲ類	e類
100	M99号墳	円墳	7.0	横穴式石室	232.692	Ⅰ類	d類
101	M100号墳	円墳	11.0	横穴式石室	233.072	Ⅲ類	h類
102	M101号墳	円墳	9.0	横穴式石室	230.962	Ⅵ類	f類
103	M102号墳	円墳	8.0	横穴式石室	232.432	Ⅲ類	e類
104	M103号墳	円墳	8.0	横穴式石室	232.8795	Ⅲ類	e類
105	M104号墳	円墳	7.0	横穴式石室	234.932	Ⅳ類	d類
106	M105号墳	円墳	11.0	横穴式石室	235.1795	Ⅲ類	h類
107	M106号墳	円墳	12.0	横穴式石室	235.3345	Ⅲ類	i類
108	M107号墳	円墳	12.0	横穴式石室	233.6345	Ⅲ類	i類
109	M108号墳	円墳	9.0	横穴式石室	231.8295	Ⅰ類	f類
110	M109号墳	円墳	12.0	横穴式石室	233.2195	Ⅲ類	i類
111	M110号墳	円墳	11.0	横穴式石室	232.0095	Ⅳ類	h類
112	M111号墳	円墳	9.0	横穴式石室	233.6895	Ⅲ類	f類
113	M112号墳	円墳	5.0	横穴式石室	232.8495	Ⅲ類	b類
114	M113号墳	円墳	8.0	横穴式石室	235.0395	Ⅲ類	e類
115	M114号墳	円墳	8.0	横穴式石室	232.7695	Ⅰ類	e類
116	M115号墳	円墳	7.0	横穴式石室	235.752	Ⅰ類	d類
117	M164号墳	円墳	7.0	横穴式石室	238.5945	Ⅲ類	d類
118	M189号墳	円墳	6.0	横穴式石室	234.212	Ⅲ類	c類
119	M190号墳	円墳	5.5	横穴式石室	234.272	Ⅲ類	b類

飯塚南古墳群

通し番号	古墳登録番号	墳丘形態	主軸長(m)	主体部形態	標高 (m)	古墳状況	分類
120	M116号墳	円墳	10.0	横穴式石室	232.7245	Ⅳ類	g類
121	M117号墳	円墳	4.2	横穴式石室	231.4645	Ⅱ類	a類
122	M118号墳	円墳	8.0	横穴式石室	232.8045	Ⅰ類	e類
123	M119号墳	円墳	8.0	横穴式石室	236.7445	Ⅰ類	e類
124	M120号墳	円墳	7.0	横穴式石室	231.8745	Ⅱ類	d類
125	M121号墳	円墳	5.0	横穴式石室	232.4695	Ⅱ類	b類
126	M122号墳	円墳	7.0	横穴式石室	233.5595	Ⅴ類	d類
127	M123号墳	円墳	11.0	横穴式石室	237.5645	Ⅰ類	h類
128	M124号墳	円墳	8.0	横穴式石室	238.0945	Ⅰ類	e類
129	M125号墳	円墳	12.0	横穴式石室	236.2895	Ⅲ類	i類
130	M126号墳	円墳	9.0	横穴式石室	237.2195	Ⅲ類	f類
131	M127号墳	円墳	6.0	横穴式石室	239.1245	Ⅵ類	c類
132	M128号墳	円墳	5.0	横穴式石室	240.767	Ⅰ類	b類
133	M129号墳	円墳	6.0	横穴式石室	246.477	Ⅱ類	c類
134	M130号墳	円墳	6.0	横穴式石室	247.307	Ⅰ類	c類
135	M131号墳	円墳	8.0	横穴式石室	250.777	Ⅲ類	e類
136	M132号墳	円墳	7.5	横穴式石室	241.277	Ⅰ類	d類
137	M133号墳	円墳	9.0	横穴式石室	238.9995	Ⅱ類	f類
138	M134号墳	円墳	4.0	横穴式石室	236.8195	Ⅱ類	a類
139	M135号墳	円墳	5.5	横穴式石室	236.2695	Ⅰ類	b類
140	M136号墳	円墳	9.0	横穴式石室	239.0395	Ⅲ類	f類
141	M141号墳	円墳	10.0	横穴式石室	241.537	Ⅰ類	g類
142	M142号墳	円墳	5.5	横穴式石室	244.1295	Ⅰ類	b類
143	M143号墳	円墳	9.0	横穴式石室	249.0745	Ⅲ類	f類
144	M144号墳	円墳	8.0	横穴式石室	243.8495	Ⅰ類	e類
145	M145号墳	円墳	7.5	横穴式石室	239.607	Ⅰ類	d類
146	M146号墳	円墳	4.0	横穴式石室	237.2195	Ⅱ類	a類
147	M147号墳	円墳	10.0	横穴式石室	242.4895	Ⅳ類	g類
148	M148号墳	円墳	7.0	横穴式石室	240.937	Ⅲ類	d類
149	M149号墳	円墳	6.5	横穴式石室	234.6545	Ⅴ類	c類

通し番号	古墳登録番号	墳丘形態	主軸長(m)	主体部形態	標高(m)	古墳状況	分類
150	M150号墳	円墳	5.0	横穴式石室	235.1595	I類	b類
151	M151号墳	円墳	7.0	横穴式石室	235.2195	I類	d類
152	M152号墳	円墳	6.0	横穴式石室	234.6695	I類	c類
153	M153号墳	円墳	9.0	横穴式石室	233.8695	I類	f類
154	M154号墳	円墳	9.0	横穴式石室	233.4895	I類	f類
155	M155号墳	円墳	8.0	横穴式石室	232.6995	Ⅲ類	e類
156	M156号墳	円墳	6.0	横穴式石室	232.2395	I類	c類
157	M157号墳	円墳	5.0	横穴式石室	233.0195	I類	b類
158	M158号墳	円墳	5.5	横穴式石室	233.8395	I類	b類
159	M159号墳	円墳	5.0	横穴式石室	233.6245	I類	b類
160	M160号墳	円墳	7.0	横穴式石室	233.0395	V類	d類
161	M161号墳	円墳	7.0	横穴式石室	233.5045	Ⅲ類	d類
162	M162号墳	円墳	7.0	横穴式石室	232.5095	V類	d類
163	M163号墳	円墳	7.0	横穴式石室	232.0595	Ⅲ類	d類
164	M191号墳	円墳	4.5	横穴式石室	237.2692	Ⅱ類	a類
165	M192号墳	円墳	6.0	横穴式石室	234.2995	Ⅱ類	c類
166	M193号墳	円墳	6.0	横穴式石室	241.477	Ⅱ類	c類
167	M194号墳	円墳	4.5	横穴式石室	248.057	Ⅱ類	a類
168	M195号墳	円墳	3.2	横穴式石室	233.2795	Ⅵ類	a類

山頂古墳群

169	M137号墳	帆立貝式古墳	24.0	組合式箱型石棺	350.30	Ⅱ類	k類
170	M138号墳	帆立貝式古墳	15.0	縦穴式石室	351.81	V類	k類
171	M139号墳	前方後円墳	54.0	縦穴式石室	356.4	I類	k類
172	M140号墳	方墳	15.0	縦穴式石室	320.0	I類	k類

森合西古墳

173	M184号墳	円墳	8.0	横穴式石室	235.3595	I類	e類
174	M185号墳	円墳	10.0	横穴式石室	236.9595	Ⅳ類	g類
175	M186号墳	円墳	12.0	横穴式石室	236.997	Ⅲ類	i類

森合東古墳

176	M165号墳	円墳	6.0	横穴式石室	235.225	I類	c類
177	M166号墳	円墳	13.0	横穴式石室	236.34	I類	j類

通し番号	古墳登録番号	墳丘形態	主軸長(m)	主体部形態	標高(m)	古墳状況	分類
178	M167号墳	円墳	6.5	横穴式石室	235.665	Ⅱ類	c類
179	M168号墳	円墳	13.0	横穴式石室	237.035	Ⅲ類	j類

上浅川A古墳群

180	M174号墳	円墳	10.0	横穴式石室	255.5325	Ⅳ類	g類
181	M175号墳	円墳	14.0	横穴式石室	256.3025	Ⅲ類	j類

上浅川B古墳群

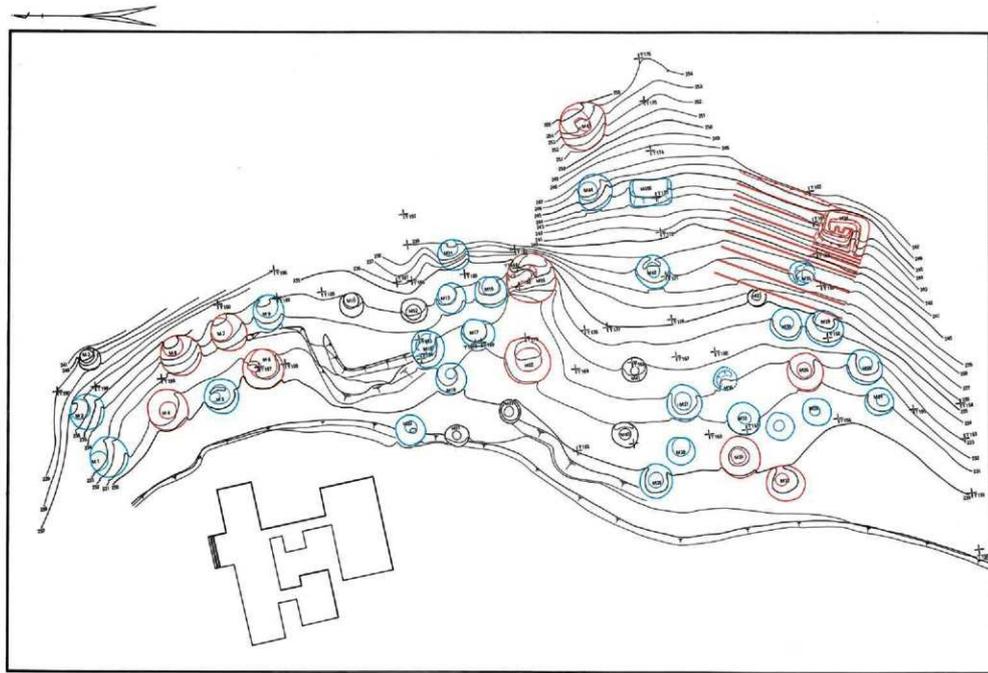
182	M169号墳	円墳	8.0	横穴式石室	256.275	Ⅲ類	e類
183	M170号墳	円墳	5.0	横穴式石室	254.165	Ⅰ類	b類
184	M171号墳	円墳	4.0	横穴式石室	254.715	Ⅰ類	a類
185	M172号墳	円墳	4.0	横穴式石室	247.5625	Ⅰ類	a類
186	M173号墳	円墳	8.0	横穴式石室	249.0125	Ⅲ類	e類

山崎古墳群

187	M177号墳	円墳	15.0	竪穴式石室	268.745	Ⅰ類	j類
188	M178号墳	円墳	8.0	竪穴式石室	267.1625	Ⅰ類	e類
189	M179号墳	円墳	20.0	竪穴式石室	267.765	Ⅰ類	k類
190	M180号墳	円墳	19.0	竪穴式石室	268.2175	Ⅰ類	k類
191	M181号墳	円墳	24.0	竪穴式石室	267.404	Ⅰ類	k類
192	M182号墳	方墳	14.0	竪穴式石室	262.8925	Ⅰ類	j類
193	M183号墳	円墳	9.5	竪穴式石室	264.435	Ⅰ類	f類

参 考 文 献

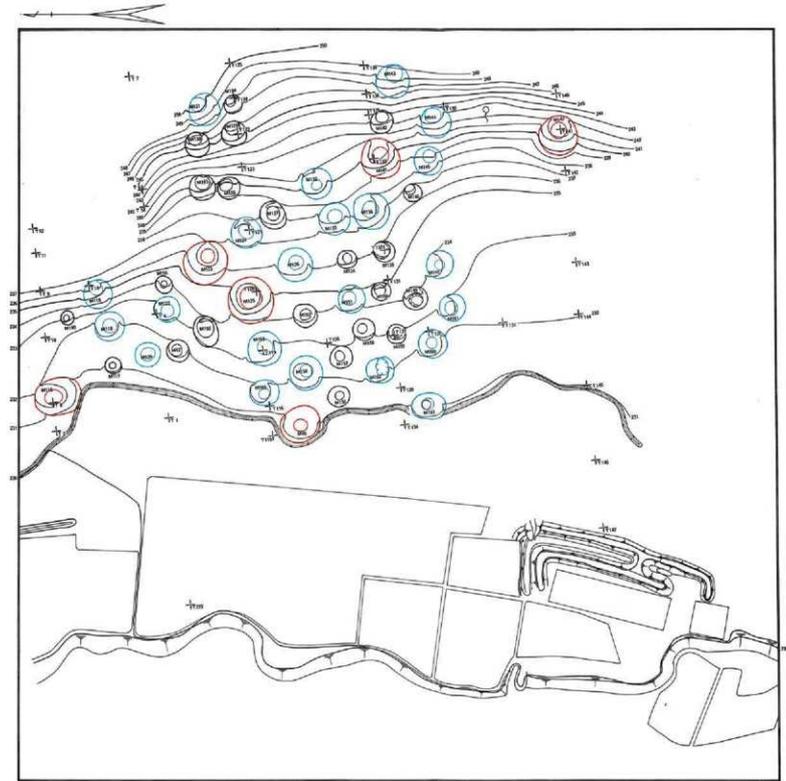
1. 西村真次 1937 「置賜盆地の古代文化」 『山形県史蹟名勝天然記念物調査報告』第9輯
山形県
2. 柏倉亮吉 1953 「山形県の古墳」 『山形県文化財調査報告書』第4輯 山形県教育委員会
3. 亀田昊明・横戸昭二 1976 「米沢市戸塚山古墳群分布調査報告」 『置賜考古』第4号
置賜考古学会
4. 加藤 稔・亀田昊明・手塚 孝 1983 「戸塚山第137号墳発掘調査報告書」 『米沢市埋蔵
文化財調査報告書』第9集 米沢市教育委員会



第5図 戸塚山金ヶ崎古墳群測量図（縮尺千分の1）



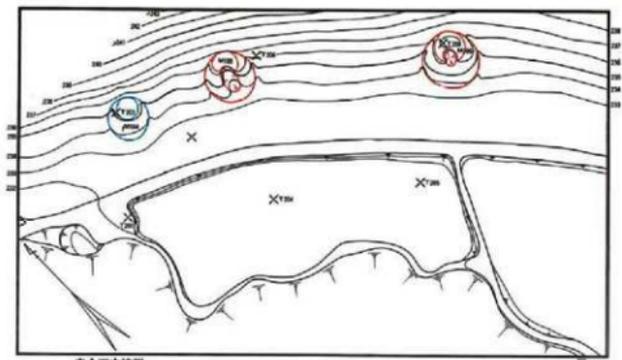
第6図 戸塚山飯塚北古墳群測量図 (縮尺千分の1)



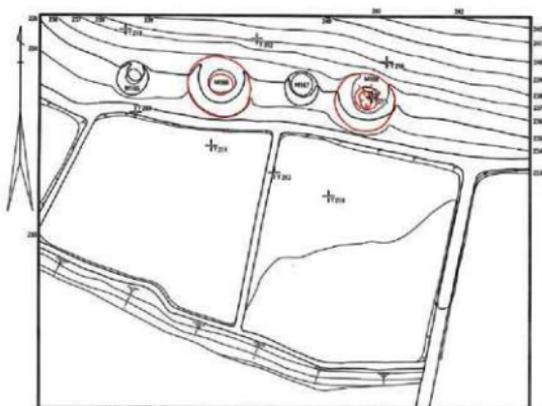
第7図 戸塚山飯塚南古墳群測量図(縮尺千分の1)



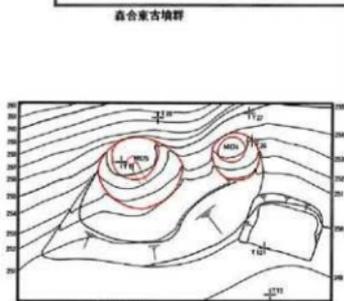
第7図 戸塚山飯塚南古墳群測量図（縮尺千分の1）



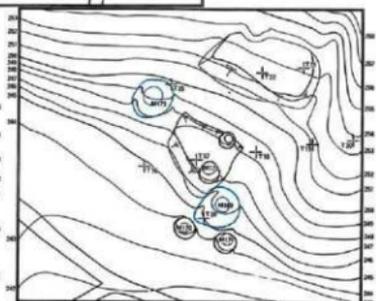
森合西古墳群



森合東古墳群

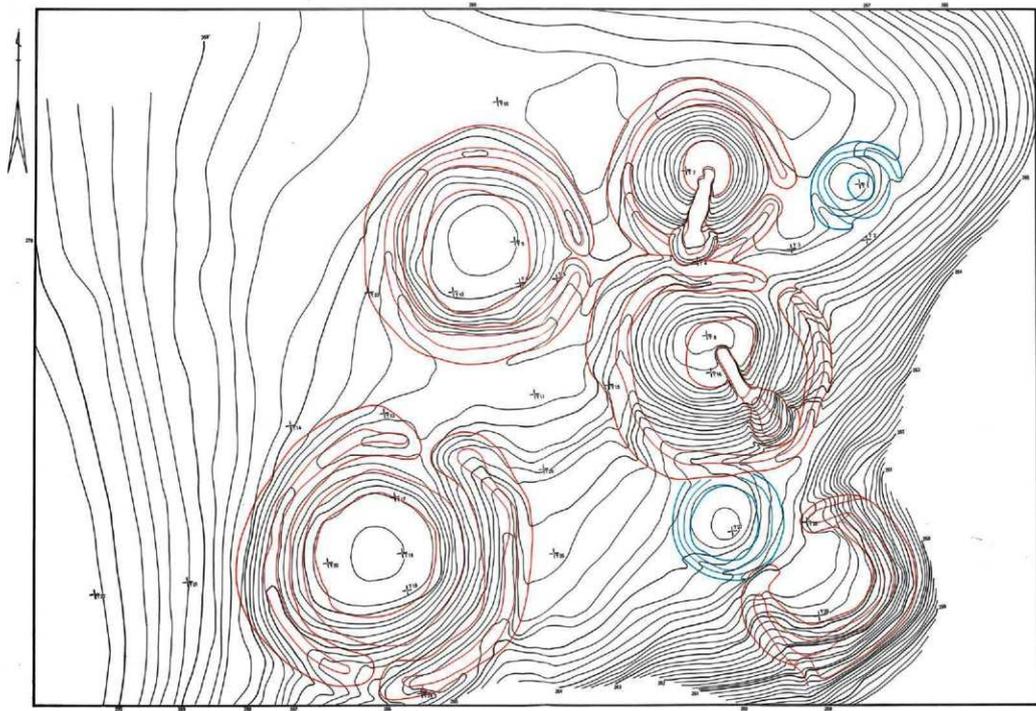


上浅川A古墳群



上浅川B古墳群

第8図 森合西, 森合東, 上浅川A, 上浅川B古墳群測量図(縮尺千分の1)



第9図 戸塚山崎古墳群測量図(縮尺4百分の1)

V 中世遺構（第10図～第14図）

この度の戸塚山古墳群分布調査の際、当初全く予想もしなかった遺構群が新たに発見された。およそ次の4つの遺構群に大別されるものである。

- 1) 山頂北斜面一帯に分布する100～150基の塚群
- 2) 山頂の東西山麓に発見された2ヶ所の廃寺跡
- 3) 旧観音堂跡の館跡（戸塚館跡、県登録番号1125）
- 4) 信仰と深い係わりをもつ行場的遺構

これらの遺構群は、いずれも10世紀以降の所謂中世に属するものと推定され、その大半が上浅川の堤入を中心に集中的な分布状態を示している。特に100基余りの塚群は、山頂から東西に走る稜線の北斜面一帯に分布しており、形態的にも11種の特異な形状を示す塚群がある。今のところ全国的にも類例の見られない特徴を有するものである。また、堤入東端の廃寺跡とその入江山麓に分布する6つの建物跡や、山頂中腹に到る石段状遺構は、所謂山岳の密教寺院迦監配置を思わせる遺構群であり、更にその三方を囲む稜線上の高峰には、行場を思わせる遺構なども確認されており、いずれも密教文化との係わりをもった戸塚山特有の重要な中世遺構群かと思われる。

以下、これら遺構群の現況、性格等について簡単に触れて置きたい。

1. 塚群

今回確認された塚は今現在で94基を数え、未踏査の範囲を含めると150基は下らないものと推定される。主にこれらの塚群は、堤入りの南側に集中しており、山頂から東西にのびる稜線の北斜面に分布するもので、地形的な分布状況から今現在のところ4ヶ所の地域に分けられる。そこで先ず各地域の分布状況や特性を述べる前に、塚群の形態と名称について触れて置きたい。

確認された94基の塚の形態は、今のところほとんど他に類例が見られず、極めて複雑な様相を示している。ここでは形態的特徴からおよそ次の11種の類型に分類し、次のような名称で呼ぶことにする。

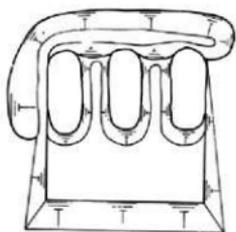
1) 上方景積壇 a

山寄せにほぼ方形の壇を築き、山側と壇に向かって壇の左側に掘り込みがあり、壇上にはほぼ中央より山側にかけて、3つの楕円形状の土塁が並列した形で構築された形状をなしている。

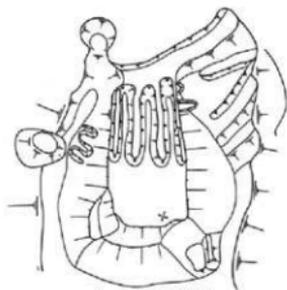
2) 上方景積壇 b

傾斜する稜線上を利用して、稜線に沿ってやや長方形に壇が築かれ、壇上の中央より山側寄りに4本の土塁が並列した形で並べられ、壇の北西隅に小さな長方形の土塁、そして壇の東側に3本の小さな土塁と少し離れて塚状の円形土塁があり、更に山側の壇の東南隅に環状の凹みを有する遺構と、壇の西南側には5段の階段状遺構が構築され複雑な様相を示す遺構である。

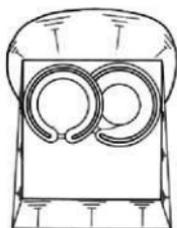
3) 上円下方壇 a



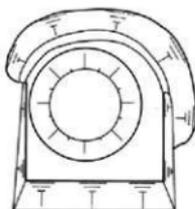
1. 上方壘積壇 a



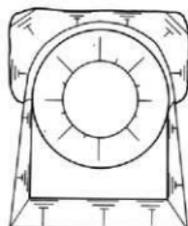
2. 上方壘積壇 b



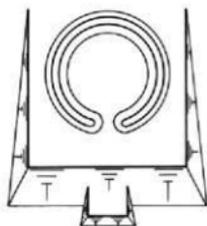
5. 上方環狀壘積壇 a



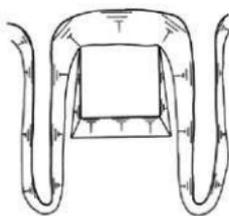
3. 上円下方壇 a



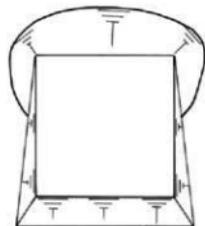
4. 上円下方壇 b



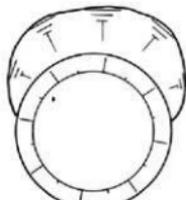
6. 上方環狀壘積壇 a



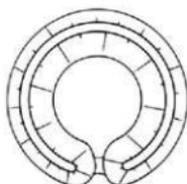
7. 兩側壘狀壇



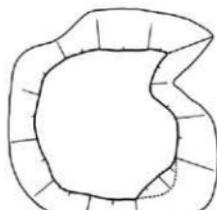
8. 方形壇



9. 円形壇



10. 環狀壘積壇



11. 前方部を有する方形壇

第10図 中世塚分類表

山寄せに土壇状の壇を築き、その上に円形の塚を乗せた形に構築され、壇の一部を囲むように山側に凹みを掘り込み、壇の左右中央付近まで掘り込みがのびている。

4) 上下下方壇 b

3) の如く壇上に円形の塚を築き、山側の掘り込みを壇の片側にのみ延長した形で、片袖形掘り込みの形に構築されている。

5) 上方環状壘積壇 a

山寄せの方形状壇を築き、壇上の中央より山側寄りに2つの環状土壘が一部重なる形に並列されており、環状土壘の一部はほぼ前方部で切り離されている。また、壇の山側には掘り込んだ凹みが見られる。

6) 上方環状壘積壇 b

前方部に小さな張り出しをもつ方形状の壇を山寄せの形に作り、壇上には環状の土壘を築いて前方部を少し切り離している。

7) 両側壘状壇

山寄せの方形状の壇を、山側と左右三方を囲むような形で、壇の左右に土壘が張り出す形に構築されている。

8) 方形壇

山寄せに方形状の壇を張り出す形に構築し、山側と壇の左右一部を掘り込んでいる。

9) 円形壇

山側の一部を掘り込み、円形の塚状の形に構築されており、小円墳の形に類似している。

10) 環状壘積壇

環状に土壘を構築し、土壘の内側は深く掘り込まれ、環状の凹みを作り、土壘の前方部は一部切り離されている形をなしている。

11) 前方部を有する方形壇

方形状の壇の一部に、前方の張り出しを作る形に構築されている。

(1) 萩ノ森塚群

山頂から東にのびる稜線の北斜面に分布する塚群で、中腹から山麓に広く分布すると予想されるが、今回の調査では限られた日数と降雪の関係で分布の確認は出来なかった。他の地域の分布状況から推定するに、50基以上は存在するものと思われる。従って分布の特徴や形態的特色については全く不明な地域であり、今後の調査に期したい。

(2) 堤入東塚群

山頂古墳群の分布する付近から山麓に到る北東斜面一帯に分布する地域で、73基の塚群を確認している。分布的特徴としては、山麓よりも中腹及び山頂付近の急斜面に多く分布しており、山

頂付近には、8)の方形壇や9)の円形壇が多く、7)の両側畷状壇が1～2加わっているが、5～6mの小規模なものが多い。それに対して標高280～260mの中腹よりやや低いところには、25m前後の1)上方畷積壇 a, 3), 4)の上円下方壇 a, b, 5), 6)の上方環状畷積 a, b)の塚が点在し8m前後の8)の方形壇が中腹全域に多く分布している。山麓には9)の円形壇と8)の方形壇が各2～3基点在しているにすぎない。塚群の主軸方向は斜面に直交して北東に向いているのが大半である。

(3) 堤入西塚群

山頂の北方約300mの稜線上に、山頂よりやや低く標高330mの岩場の多い通称一本松と呼ばれる峰がある。この峰の北東斜面より、北東にのびるもう一つの稜線付近の斜面に分布する地域で、19基の塚群を確認している。峰より北東にのびる低い稜線上に2)の上方畷積壇 bと、そのすぐ下方に11)の前方部を有する方形壇が各1基、その北側斜面と峰のすぐ下の急斜面に8)の方形壇が比較的多く分布している。塚群の主軸方向は、北東～東を指している。2)の上方畷積壇 bは各塚群中最も規模が大きく、主軸方向に東西29.8m、南北24mを計り、東西にやや長方形の方形壇で壇の前方部で稜線からの比高差は7mを有する。壇上の中央山側に築かれた4本の土塁や周囲の遺構は、今のところ性格不明だが一つのセットとして密教文化との何らかの係わりを持つ遺構ではないかと考えている。(第11図)更にこの2)上方畷積壇 bから約17m 稜線を下ったところに主軸方向東西17.3m、南北15mの11)前方部を有する方形の壇がある。この方形壇上の南寄りには稜線の山道があり、往来するうちに自然に崩れたものか前方部の片側がこわれ、不整形の張り出しを有する壇で比較的規模は大きい。

(4) 小山塚

浅川の狐塚側に面した北斜面の丘陵状突端に山の神が祀られている通称小山がある。その登り口の鳥居の左側に径6mの石積の円墳状の塚が単独で発見された。堤入り側の塚群とは形態的にも性格の上でも異なるように思われる。旧藩時代頃まで上浅川より下新田、窪田方面に通ずる旧道が戸塚山の北山麓に沿って東西に走っており、途中岐路の要所に経塚が戦前頃まで残っていたが、この小山塚も狐塚方面への岐路付近にあたり、或は類似するものか。今のところ不明である。

以上、単独の小山塚を含め、4つの地域の塚群分布の特色について簡単に述べてきたが、これを塚群全体から眺めてみると、いくつかの特色があげられる。

その第1は、堤入周辺に集中し、山頂側の北斜面に限られて分布すること。

その第2は、堤入に後述する真言系鹿寺跡と坊跡があるが、その坊跡の背後を意識的に避けて塚が築かれているように思われること。

その第3は、塚群の11類型の中、1)～6), 10), 11)の最大長30～25mの大型の塚が、標高270m前後の中腹よりやや低目の緩斜面に、東西に沿って各1基が点在しているこ

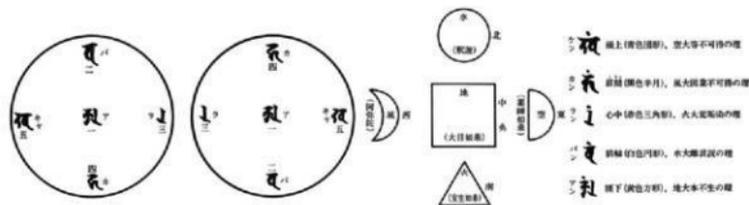
と。

その第4は、5～6mから8m前後の小規模な7)～8)の塚は、中腹より山頂近くまで数多く密集し、9)の円形壇は斜面全域に分布していること。

その第5は、1)～11)の類型の要素は、方形の壇、円形又は環状の形、それに土塁や溝の3つの要素の組み合わせから成り立っており、後述する密教信仰と何らかの係わりを有する塚群を思わせること。

塚群に見られる類型要素の方形又は壇の形は、密教修法の中で大地の地・中央・大日如来を表わし、円形は北方の水・釈迦如来を表わす。又、土塁や溝は俗界と佛界を区分する意の結界を表わしているとも考えられる。更に、密教に何らかの影響を与えた中国の陰陽道の中では、天を円で表わし、地を方形で表わし、天地和合する姿を上円下方の形で表わしている。宇宙の根源を表わす大日如来は「地・水・火・風・空」の五大で表わされ、空と地は即ち天と地であり、方形の上に円形が重なる姿は、真言密教の本尊大日如来の姿そのものである。

ちなみに、真言密教系の『土砂加持秘法』及び『弘法大師法』の中に「字輪観」という観念修法がみられ、宇宙の根源大日如来の姿を梵字で^{フデヒヤクワツク}**𑖀𑖄𑖅𑖆𑖇𑖈𑖉**、これを宇宙の五大要素として「地・水・火・風・空」と表わし、大地の東西南北中央にそれぞれの形と諸佛を配置し、修法者自身(人間)の身体各部にもそれを観念として配置し、大地に座して修法者と天地とが一体となって佛となる(即身成佛)観念秘法で、次のような形で表わされている。



個々の塚群の中には、それぞれを佛を形で表わしている場合もあり、そのいくつかを組み合わせたものも見られる。塚の円は釈迦如来の水又は、五大要素を総合した円とも考えられ、方形は大日如来の、地、団円(半円錐状)は薬師如来の空、環状の凹みは、宝生如来の火、又は阿彌陀如来の風、半月形の土塁は阿彌陀如来の風、というように塚を具象化して考えてみることもできる。塚群類型の2)上圓下方壇は、これら五大要素の総合された姿とも解されないわけではない。塚群の性格を論ずる時、更に検討を要する問題の一つである。

2. 鹿寺跡

本調査の際、鹿寺跡と思われる遺構が次の2ヶ所で確認された。1つは戸塚山の西南山麓に、

もう1つは戸塚山北東山麓の堤入にあつて、いずれも片袖型の土塁を有するが、後者の廃寺跡は付近に坊跡と思われる遺構が数ヶ所で発見され、規模的にははるかに大きい。

(1) 飯塚廃寺

山頂の西南西山麓にあつて、遺構の一部は近年開田され姿を失っているが、その中心部は杉林と原野で現存しており、測量によっておよそ次のような遺構を確認することが出来た。

片袖の土塁と濠をもつ古寺院跡と思われる遺構で、土塁は東と北側に築かれ、南北54m、東西45m、幅5mを計る。南側の一部と西側は馬橋川の侵食崖で区切られ、ほぼ長方形の台地の中に東西9m、南北32mの建物跡と東南隅に9m×7mの建物跡がある。東側土塁の中央より南寄にブリッチを有し、その東方山麓に井戸跡を伴ったテラス状の遺構があり、その井戸から濠の北東隅に流出するように濠に溝が掘り込まれている。北側の濠と土塁は、開田の際破壊されたものと思われ、途中で姿を失っているが、北西隅の馬橋川東岸の断崖にわずかに土塁と濠跡が残っており、濠の流水が馬橋川に放流されていたことがわかる。東南隅に近い東西9m、南北7m建物跡は、西は馬橋川の侵食崖に東側は土塁の一部に連結されているところから、山門的な配置が考えられる。また、東側土塁の東南寄りのブリッチは、井戸のところを通して、後述する山頂への行場に通ずる行道への通路と考えられる。

さて、この古寺院跡の性格だが、実は筆者が護持している大覚院(本山修験)の縁起伝承によると、宝暦年間(約230年前)に牛頭天王を祀る薬師堂と共に現在地戸塚山北山麓に移ったが、それ以前は戸塚山西側に金剛院大覚坊として、山頂に牛頭天王を護持し、鎌倉期頃に建立された伝承があり、以前から本山派修験に属しながらも湯殿山や大峯山(吉野)、日光二荒山などの真言密教的色彩の強い修験坊であったが、その旧跡は今日まで不明のままになっていた。それが今回の調査によって亀田、手塚両名が確認したものであり、大覚坊跡と推定した根拠は次のような理由による。

- ①縁起伝承にある井戸、参道(行道)の巨石、行場の岩蔭、道順などの地理的な景観が一致すること。
- ②岩蔭行場より室町期以前に製作されたと思われる「硯」が地元の、故油井善作氏によって発見されていること。硯は長さ16.8cm、幅11.2cm、厚さ6.5cmの長方形をなし、石材は福島県栗子付近に見られる灰色泥岩で、荒削りされた側面には丸のみ使用の痕跡があり、鎌倉～室町期頃の製作技法かと思われる。(第11図)岩蔭に参籠修法の際使用したのと考えられる。
- ③建物や土塁の配置と計測の中に、大覚院に口伝秘法とされてきた「聖徳太子相伝四神流九疇分野家相法」が採用されていること。これは紙数の関係で割愛するが、建物の間口、奥行を九等分に区画し、その位置によって門や玄関、井戸、付属建物などの吉凶が占術されるもので、地割等については、更に陰陽道周易による「乾兌離震巽坎艮坤」の8卦が組み入れられ

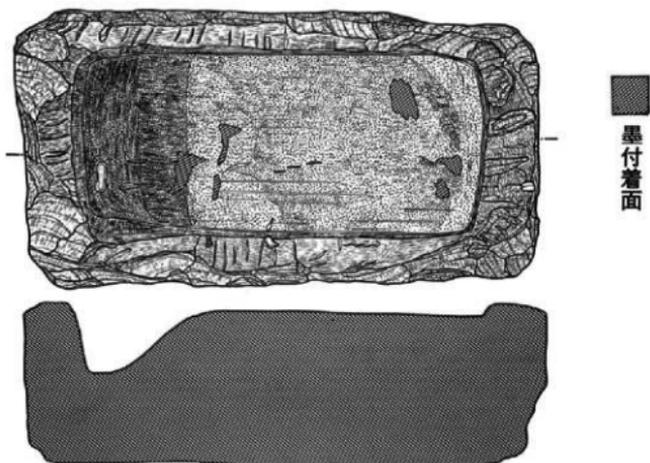
るものである。古代都城の条坊制などに陰陽師が伝えてきた占法と類似するもので、その企画性が採用された遺構である。この廃寺跡の場合は南北主軸を真北にとり、湯殿山の方向に、東西の延長が慈覚大師開山と伝えられる一念峰の方向にとられている。ちなみに慈覚大師開山と伝えられる一念峰の別当正覚院（現在高畠町佐沢）は、以前戸塚山東山麓の地にあつて（現在正覚田の地名あり）、大覚坊と本末関係にあり、末寺大覚坊は戸塚山の西に、本寺正覚院は後述する堤入廃寺跡の真言勢力に押され佐沢の現在地に移されたと伝えられている。

(2) 堤入廃寺

戸塚山の2つの山陵に囲まれた緩傾斜地に、旧藩時代に造成された灌漑用の堤がある。寛政年間に拡張修復され、現在の南北堰堤をなしているが、堰堤までの水域約36,000㎡、水域から入江の山麓まで約51,000㎡を通称堤入と呼んでいる。今回発見された遺構群は、堤入の際に近い東端中央に廃寺跡が1ヶ所、堤入周辺山麓に坊跡か御堂跡と思われるテラス状遺構が6ヶ所、石段状遺構が1ヶ所、消水を利用した用水溝3ヶ所などである。

遺構群の中心をなす古寺院跡と推定される遺構は、南北約340m、東西約150mの範囲にあつて、北側と西側の一部には土塁と空濠が、南側には5本の空濠跡がある。5本の空濠の中、北側の空濠は幅1m、深さ60cmを有し、廃寺跡のほぼ中央を東流しているところをみると、庭園の池に流れる流水路かとも思われる。建物跡については調査の時間もなく今のところ不明である。

この古寺院跡に関連すると思われる遺構群としては、まず廃寺跡のすぐ南山麓に約140㎡の建物



第11図 戸塚山行場出土硯実測図

0 2 4 6 8 10m

跡（A地点）が1ヶ所、旧観音堂下の山麓に2ヶ所の建物跡（B地点約168㎡、C地点約150㎡）と清水が1ヶ所、堤入の西北山麓に2ヶ所（D地点約168㎡、E地点約300㎡）の建物跡、更に堤入奥の西南山麓に比較的大い建物跡（F地点約645㎡）と清水流水溝跡があり、このF地点の東上り山頂に向かう中腹に埋没した石段状の遺構が所々に残っている。この石段は山麓から少し登った所から中腹まで続き、中腹のやや平坦地で終わっている。その平坦地には樹令の古い杉の老木が未だ数本残っており、奥の院としての建物跡とそれに通ずる参道かと考えられる。

さて、この古寺院を中心とする遺構群であるが、地元上浅川に大同元年創建と伝えられる嶺山瑞雲院（以前真言宗、現在曹洞宗）の旧跡かと考えられる。瑞雲院の縁起によると、大同元年（806年）飛彈の名匠の建立に始まり、高野山で密門の奥義をきかめた通覚正僧正が、文治2年（1186年）、出羽26郡を巡錫して後、戸塚山の中腹に熊野山舞鶴庵を結び、建久元年（1190年）に万年寺、同3年（1192年）に熊野堂を建立したという。建久5年（1194年）6月の7ヶ条にわたる禁制札が現存している。その後応永6年（1399年）月泉法印が真言宗から曹洞宗に改宗、瑞雲院の開山となり、將軍足利義政が村の年貢を取らずに寺の建設費に当てる記録も見える。かつて40数か所の末寺を東北各地に持って支配した瑞雲院の寺院勢力は、まさに東北の本山級寺院であり、朝廷の勅願所でもあった寺院である。

真言時代に熊野堂、舞鶴庵、万年寺が、山の中腹入江に創建されたと言うから、先の片袖土塁を持つ古寺院跡は、中心となる万年寺跡と考えられ、熊野堂は真言宗の本拠地高野山の熊野権現に倣ってこれを中腹の奥の院に勧請して建立し、更にF地点の奥の院昇り口に舞鶴庵を建立されたものと推定される。A～E地点の遺構は残念ながらそれを裏付ける資料が得られなかったが、関連する坊跡か御堂跡と考えられ、この万年寺を中心とする6つの坊又は御堂と熊野堂奥の院を含む遺構群は、一つの寺院配置のセットとしてとらえることが出来、堤入全域が真言密教当時の山岳寺院伽藍配置をなしていたものと考えられる。

3. 館跡（戸塚山館跡）

戸塚山々頂から南西に走る稜線の途中から、丘陵状の山地が更に北東にのびているが、この丘陵上の一帯高い所を選んで本遺構が構築されている。丘陵上を利用して東西130m、南北約60mの範囲を有し、東側に4重の土塁を築き、3本の空濠を持っている。この土塁と空濠の一部が更に南と北側にのび、館の東側をとり囲むように構築されている。土塁と土塁の幅は約8～10m、土塁上場と空濠下場との比高差は3～4mを有し、掘り込みが深く土塁は急崖をなしている。両側の稜線には土塁や空濠は明確でなく、自然傾斜の地形を利用してわずかの掘り込みと盛土によって館の範囲を区分している。

この館跡の中央部山頂には、置賜三十三番札所の観音堂が昭和28年頃まで建立されていた所で別当戸塚山泉養院（元修験、現在天台寺門宗）の縁起伝承によると大同元年創建で、正徳元年（1711

年)に再建されている。再建前は観音山(現在の館跡付近)に二重の堀をめぐらして南向に建立されていたという。空濛は観音堂防火のために利用されたとも伝承されているが、構築状態からすると観音堂再建以前からの館跡と推定される。ただし観音堂の大同年間創建の伝承は当地方の社寺仏閣に多く、先述の万年寺をはじめ、亀岡文殊、宮内熊野神社、笹野観音はいずれも大同年間の創建で、以前真言宗の社寺であった。この観音堂もかつて真言宗の万年寺の支配下にあったとの伝承もあるので当地方の大同年間創建は、真言密教が盛んだった頃の万年寺との本末関係で、万年寺創建がそのまま末寺や坊の創建年代に後世書かれたものが多い。従って観音堂の山頂建立もやや時期が下るものと思われ、館跡の構築推定から鎌倉・室町初期に到る豪士浅川采女(14~15世紀代)の頃と今のところ考えて置きたい。

この浅川采女は長井時代から伊達時代の有力在地豪族で歴代襲名しており真言宗の万年寺から曹洞宗の瑞雲院を建立したと伝えられている。

ちなみに本館跡の周辺に分布する館跡は次の通りである。

- 浅川館跡(大字浅川) ○飯塚館跡(大字上新田) ○新田山館跡(大字上新田)
- 館の山館跡(大字川井) ○森館跡(大字川井) ○長手館跡(大字長手)
- 古郷部館跡(大字木和田) ○古峯神社館跡(大字木和田)

以上8ヶ所の館跡は山城形態の館である。

- 中里館林館跡(大字上新田) ○三合目館跡(大字下新田) ○下浅川館跡(大字浅川)
- 岡の台館跡(大字長手)以上の4ヶ所は平城形態の館である。

4. 行場と行道

堤入の真言密教当時の伽藍配置を思うとき、それを囲む3方の峰々は霊峰と仰がれ信仰の対象又は或る種の行場が想定される。(第14図)

その一つは、M139号墳の前方後円墳のある山頂である。この山頂に先述の大覚坊護持の牛頭天王が祀られていたという伝承は多少疑問を残すが、従来墓域と考えてきた山頂南側をとりまく溝は、聖域と俗界を結界する遺構と考えられ、南西山麓の大覚坊跡より、山麓の井戸のある水行場を経由して稜線を登ると山頂結界の溝の切れ目に通じており、この溝の切れ目が第一行場cへの入口と考えられる。

第2の行場bは山頂より稜線をやや北に下がった所に岩場の多い峰があり、岩場全体をとり囲むように北東斜面側に幅1~1.5mの掘り込みがある。これも又山頂南側の溝と同様、結界を意識した遺構と考えられる。その峰より西の稜線を下ると途中に巨岩が2つあり、その下に天井に火を焚いた痕跡を残す岩蔭があってその付近より先述の硯が発見されている。一つの行道であり第1と第2行場bの霊峰は密教での金胎両峰として仰がれたのかも知れない。

第3の行場aは、堤入の北東にある館跡の付近である。館跡を中心に岩場が多く旧観音堂跡でも

あり、堤入の万年寺付近より北の稜線を登って第3、第2、第1の各行場に来るコースと、南に登って第1、第2、第3と廻る2つのコースが想定される。

ここではあくまでも仮定の域にあって、今後実証すべき遺構の確認と継続調査の結果によって明らかにして行きたい問題の一つでもある。

5. まとめと課題

先の中世遺構については、本調査の途中で偶然発見されたものが大半で、当初の目的でなかっただけに、本報告も不十分な結果となった。しかし今日まで空白となっていた9世紀以降の好資料が戸塚山に集中的に発見できたことは何よりの成果であったし、今後の調査の重要性と課題が新たに認識されたのである。

本調査の段階で明らかとなった点を整理してみると次のようになる。

- 1) 9世紀以降に構築されたと思われる100基余の塚群。それも複雑な形態で11種の類型を有すること。
- 2) これら塚群の分布には堤入の南側で山頂稜線より北斜面に集中している点と、山頂付近、中腹山麓の類型による分布状態に若干の相違があること。
- 3) 堤入を中心に、真言特有の片袖土壘を持つ万年寺と想定される古寺院跡と、それに伴う舞輪庵を含む6つの坊又は御堂跡、熊野堂と想定される奥の院と石段跡などが発見され、これらが山岳宗教の御監配置をなしていたこと。
- 4) 山頂の西山麓に、真言系の色彩の強い片袖土壘と濠を有する大覚坊と想定される修験坊跡の遺構が確認されたこと。
- 5) 三つの峰を中心とする行場とそれらをつなぐ峰の東西の行道跡、更に西側行道の途中にある岩蔭行場など、推定段階だがその痕跡を数ヶ所で確認できたこと。
- 6) 旧観音堂跡を中心に、4重の土壘と空濠をもつ山城形態の館跡を確認できたこと。

以上の諸点から、これらの中世遺構群は、主に平安末期から鎌倉、室町期に続く密教文化との係わりをもつ性格としてとらえることができ、戸塚山を中心とする置賜南部の密教或いは修験道との信仰形態、更には密教考古学とも言うべき新たな研究分野に重要かつ多くの問題点を提起するものと思われる。

従って当面する今後の課題として

- 1) 残されている萩の森塚群の分布調査を行ない、塚群の分布状況を総合的に把握すること。
- 2) 塚群の実測による正式詳細分布調査を行なって、分布形態をより正確に記録する必要性のあること。
- 3) 塚群の性格を明らかにするために、一部試掘調査及び他地域の類例、関連遺構の調査、密教、修験関係の修法など調査して、広く比較検討を要すること。

- 4) 堤入古寺院跡、坊跡については詳細な調査と共に、堤東部の水田地帯発掘調査によって考古学的な裏付が必要なこと。
- 5) 行場、行道に係る遺構の詳細な調査と戸塚山周辺地域の廃寺（真言、天台、修験の）伝承や遺構の調査を行ない、関連性を比較検討してみること。
- などの今後検討すべき問題が多い。中でも1)と2)は基本調査として急務を要する。3)～5)については、今後継続的に比較検討を要する研究課題でもある。

なお、最後に中世遺構の中心をなす塚群については、類例を求めたが今のところ見当らず、ただ1ヶ所鶴岡市藤沢岩屋遺跡調査報告書（1981年）の中に「岩陰遺構で行なわれた修法として、地輪（壇）、水輪（壇）、火輪（壇）、風輪（壇）、空輪（壇）の五壇密法を配石された遺構の発見」の報告がなされており、この度の塚の形態、性格を考える時、配石と土塁との違いはあるにしても、非常に参考になった報告例である。

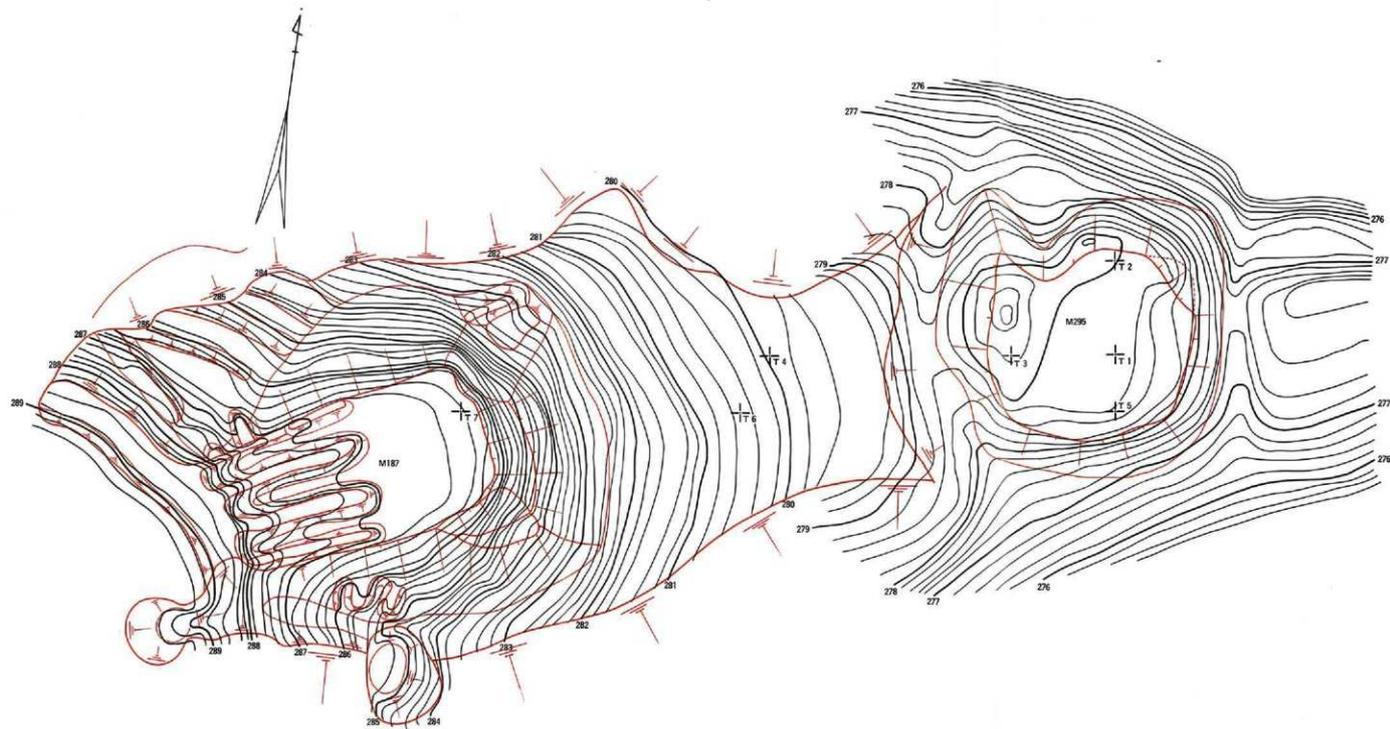
戸塚山に発見された塚群の性格については、今後検討を要するが、次の3つのいずれかが可能性として考えられる。

- ①成る種の供養塚の性格を有し、真言密教又は修験の修法を具象化したもの。
- ②成る種の埋葬施設か火葬墓の性格を有するもの。
- ③成る種の目的で、呪術的或いは自然崇拜的な折りを行なったもの。

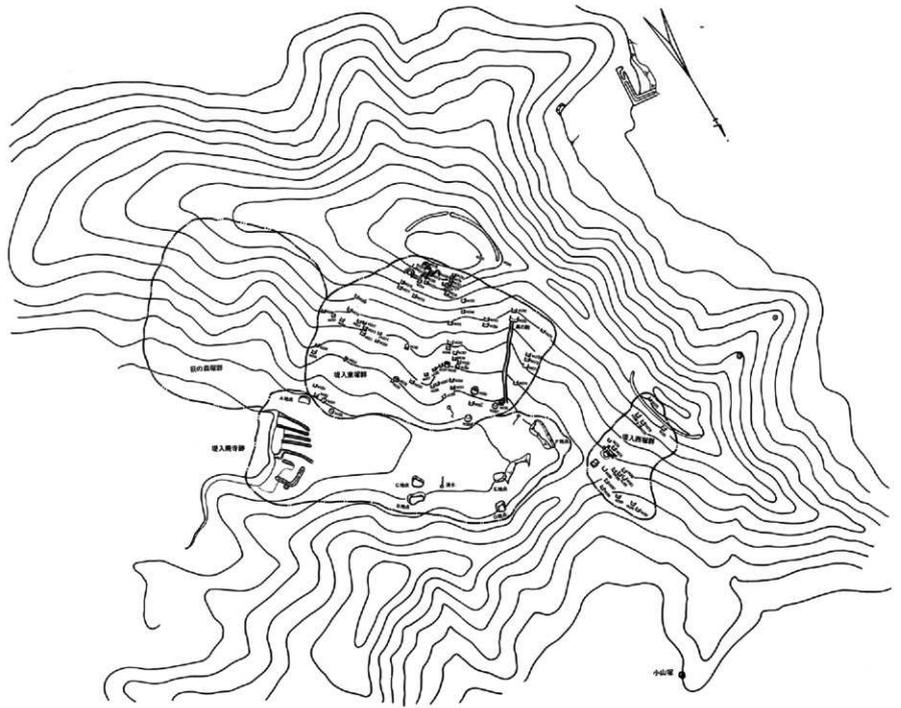
筆者は今のところ①の性格が強いものと考えている。真言系万年寺との関係において今後更に検討を加えてみたい。

参 考 文 献

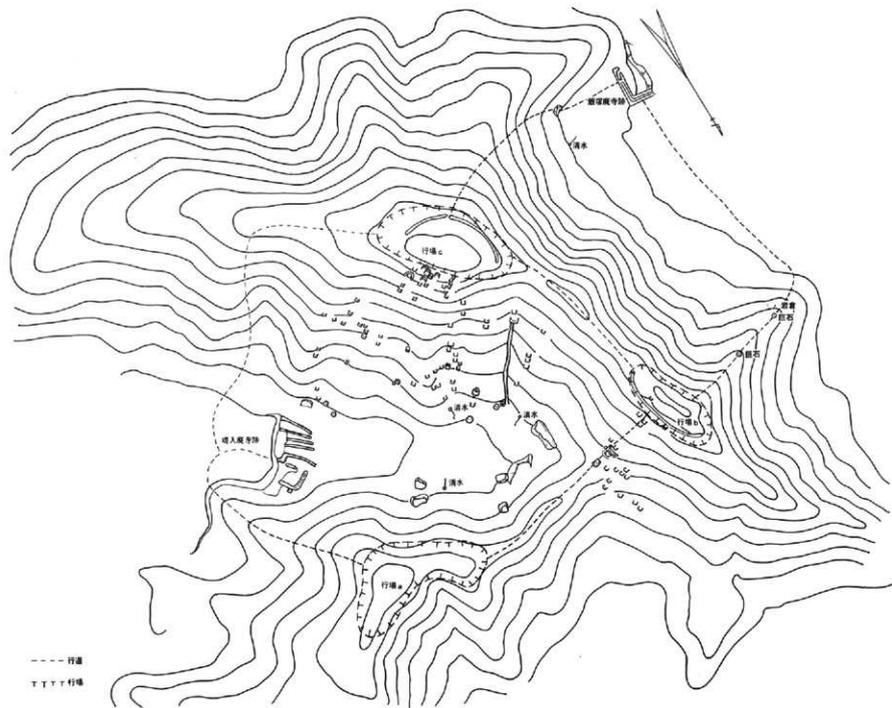
1. 戸川安章 1975 「羽黒山修験道資料」 『山形県文化財調査報告書』第20集 山形県教育委員会
2. 戸川安章他 1980 「藤沢岩屋遺跡」 『山形県鶴岡市第Ⅱ期第1次調査概報』 鶴岡市教育委員会
3. 戸川安章他 1981 「藤沢岩屋遺跡」 『山形県鶴岡市第Ⅱ期第2次調査報告書』 鶴岡市教育委員会
4. 石田茂作 1973 「修験道とその遺物」 荘内文化財保存会刊行



第12図 戸塚山M187号, M295号墳測量図 (縮尺2百分の1)



第13図 戸塚山中世遺構概要図 (縮尺5千分の1)



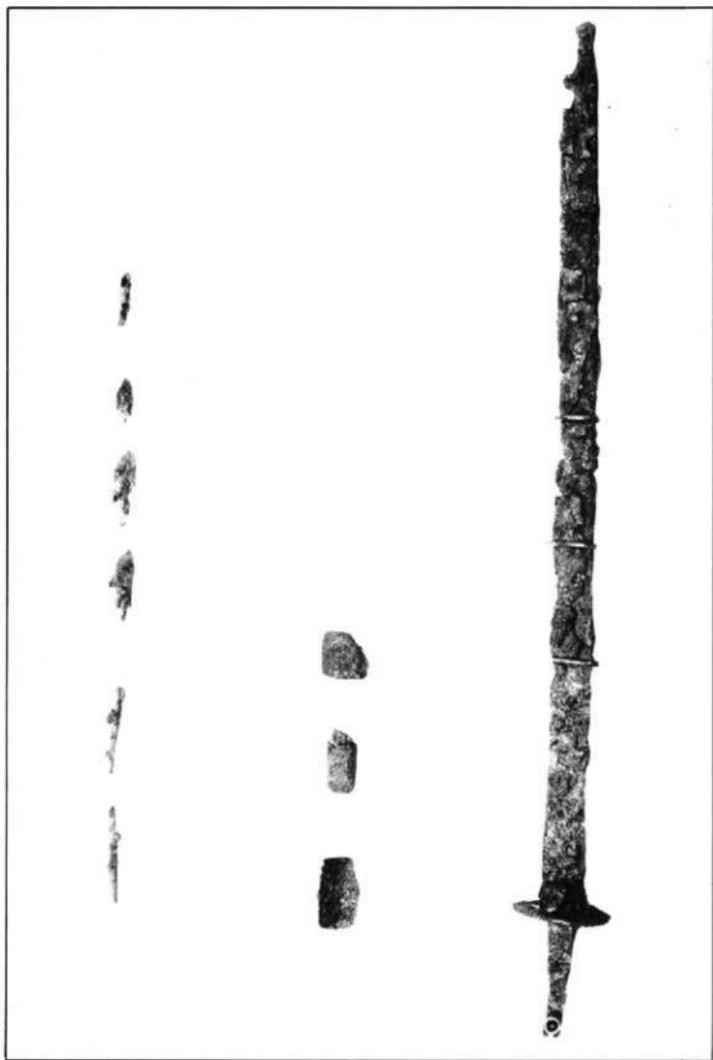
第14回 戸塚山行道・行場概念図 (縮尺5千分の1)



M179号墳全景



M181号墳全景



飯塚北古墳群出土直刀，鉄鍔，柄

昭和59年3月1日発行

戸塚山古墳群詳細分布調査報告書

発行 米沢市教育委員会
米沢市金池三丁目1-14

印刷 (株)よねざわ印刷
米沢市城西二丁目3-72

